

# 寛政期読本『怪談雨之燈』の研究と翻刻

三宅 宏幸

## 一、『怪談雨之燈』について

寛政期に刊行された読本『怪談雨之燈』について、翻刻と若干の私見を示す。

数年前に論者が入手した読本『怪談雨之燈』五卷五冊は、山崎麓著・書誌研究会改訂『改訂日本小説書目年表』<sup>注1</sup>に、「文政九年（一八二六）刊」とある情報だけで、その所在や詳細についてはこれまで紹介されてこなかった。

読本を網羅的に調査・研究した横山邦治「中本ものの諸相」<sup>注2</sup>は、本書について次のように記している。

「怪談雨の燈」も半紙本である公算が大である。寛政九年刊の「怪談夜半鐘」四耳学斎の序文に「因著雨燈次以此編改号」と見え、「享保以後大阪出版書籍目録」に、

怪談雨の燈

作者 玉香山人（心齋橋）

板元 柏原屋重兵衛（博労町）

出願 寛政八年六月

許可 寛政八年八月五日

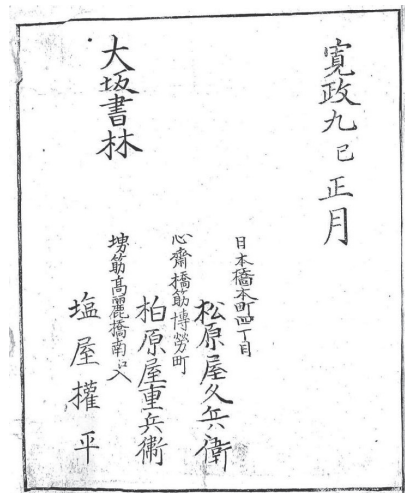
とあるのを考え合わせると、「怪談雨の燈」として出版許可の申請をし、いざ出版のとき「怪談夜半鐘」と改題し、文政九年再刷の際に原題の「怪談雨の燈」に復して出版したとも考えられるのである。寛政九年刊本の序文は耳学斎であるが、本文は「李羅玉香子」の評めいたものが各話の末に付いていて、玉香子が作者かとも思われ、文政九年刊本を見ていないので確言はできないが、同一本である可能性が大である。とすれば、これは半紙本である。

横山論考では原本の所在が不明であったため、『享保以後大阪出版

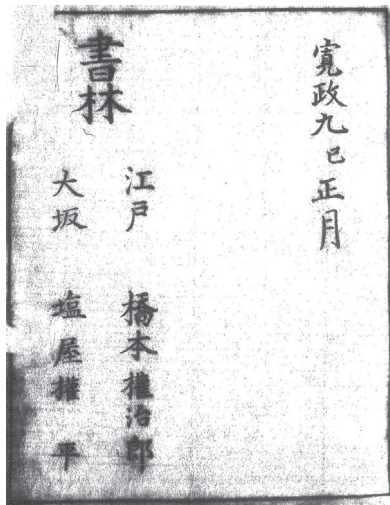
書籍目録<sup>注3</sup>の記録や寛政九年（一七九七）刊『怪談夜半鐘』（耳学斎作）の巻末評語に玉香の名が見えることをふまえ、『怪談夜半鐘』の改題本である可能性を述べた。しかし、論者が入手した書籍を確認すると、『怪談夜半鐘』と内容が異なること、挿絵の図柄は寛政頃のものに近いこと、また横山論考がふれた記録の寛政八年という年時から、本書が『怪談夜半鐘』の改題本ではなく、寛政頃には成立していたと推測できた。一方で、入手した本は裏表紙が改装されており、五巻末の刊記が欠けた状態であった。そのため可能性として、寛政期に成立したものの文政期まで出版がされなかった場合も考えられ、寛政刊という確定ができなかった。

ところが、二〇一九年に巻一と巻二を欠いた『怪談雨之燈』三冊を入手したところ、五巻末に刊記【図1】が残っており、「寛政九已正月」と記されていた。出願した書肆柏原屋重兵衛の名が入ることや（「日本橋本町四丁目／松原屋久兵衛」は手書き）、前掲横山論考で改題とされた『怪談夜半鐘』（国立国会図書館蔵…一八八一—八九）の刊記【図2】とも異なるので、『怪談雨之燈』の刊記と考えてよい。よって、『怪談雨之燈』は寛政九年に出版されたと考えうる。『改訂日本小説書目年表』に記された「文政九年」の記載は「寛政九年」の誤記であろうか。

なお、水谷不倒「古書の研究」<sup>注4</sup>が明治期と大正期の古書の値段を



【図1】『怪談雨之燈』刊記（論者架蔵）



【図2】『怪談夜半鐘』刊記  
（国立国会図書館蔵）

メモしており、『怪談雨之燈』は大正一二年に五冊が「三圓」で売られていたようである。この価格は『英草紙』（合一冊）や『不埒物語』（七冊）と同価格である。

## 二、『怪談雨之燈』諸本と書誌

では、現状で把握している『怪談雨之燈』の諸本について、以下に書誌を示す。なお、書名は内題を採用している。

### ①三宅所蔵本（A）

所蔵 三宅宏幸

体裁 半紙本、五卷五冊。

表紙 原装焦茶色無地。縦二二・五×横一五・八糎。裏表紙は改

装金茶色無地。

題簽 卷一欠。原題簽「怪談雨の燈 式（三〓五）」（左肩、四周

双辺子持粹）。

内題 卷一「怪談雨之燈初編第一／素羅 玉香子著／成林 新狸

子校」。

卷二「怪談雨之燈初編第二／素羅 玉香散人著／成林 新

狸山人校」

卷三「怪談雨之燈初編第三／素羅 玉香山人著／成林 新  
狸散人校」

卷四「怪談雨之燈初編第四／素羅 玉香散人著／成林 新  
狸誹士校」。

卷五「怪談雨之燈初編第五／素羅 玉香山人著／成林 新  
狸子校」。

序 「雨之燈序」、末尾に「黃薇 玉香識」。

目録題 「怪談雨之燈目録」。卷之一〓卷之五の目録を掲げ、末尾に

「目録畢」。

版心 「怪談雨之燈卷之一（〓五）〇（丁付）」。

尾題 「怪談雨之燈第一（〓五）終」。

匡郭 四周單辺、縦一七・三×横二三・五糎（卷一）。

行数 序八行、目録八行（卷一）。本文八行（全卷）。

丁数 卷一 序一丁「二」、目録一丁「二」、本文一四丁「一（

十四）」。

卷二 本文一六丁半「一（〓十五、終）」。

卷三 本文一六丁「一（〓十四、十四、十五）」。三丁と四

丁の綴じが逆、「十四」の丁付が二丁ある。

卷四 本文一四丁半「一（〓十四、終）」。

卷五 本文二七丁半「一（〓十八）」、刊記半丁。

挿絵

卷一 九ウ・十オ

卷二 十二ウ・十三オ

卷三 六ウ・七オ

卷四 八ウ・九オ

卷五 十二ウ・十三オ

刊記

欠。

印記

全冊一オ上部に「現金」。

備考

裏表紙に墨書で「依田直義」の署名あり。

② 三宅所蔵本 (B)

所蔵 三宅宏幸

体裁

半紙本、三卷三冊 (卷三〇五)。

表紙

原装焦茶色無地。縦二二・四×横一五・九糎。

題簽

なし。

内題

卷三「怪談雨之燈初編第三／素羅 玉香山人著／成林 新

狸散人校」。

卷四「怪談雨之燈初編第四／素羅 玉香散人著／成林 新

狸誹士校」。

卷五「怪談雨之燈初編第五／素羅 玉香山人著／成林 新

狸子校」。

版心

「怪談雨之燈卷之三 (〇五) 〇 (丁付)」。

尾題

「怪談雨之燈第三 (〇五) 終」。

匡郭

四周單辺、縦一七・四×横一三・三糎 (卷三)。

行数

本文八行 (全卷)。

丁数

卷三 本文二六丁「一 (〇十四、十四、十五)」。三丁と四

丁の綴じが逆、「十四」の丁付が二丁ある。

卷四 本文一四丁半「一 (〇十四、終)」。

卷五 本文二七丁半「一 (〇十八)」、刊記半丁。

卷三 六ウ・七オ

卷四 八ウ・九オ

卷五 十二ウ・十三オ

挿絵

刊記

「寛政九巳正月／大坂書林／心齋橋筋博労町 柏原屋重兵

衛／堺筋高麗橋南江入 塩屋権平」。

印記

全冊一オ上部に「井清」「眞志甚」「越長」。

備考

刊記の中央下部に、墨書で「日本橋本町四丁目 松原屋久

兵衛」と書肆を書き加えた落書きがある。

③ 九州大学附属中央図書館雅俗文庫所蔵本

所蔵

九州大学附属図書館雅俗文庫 (二〇一三〇二二)

書型

半紙本、一卷一冊 (巻四のみの零本)。

表紙 原裝焦茶色無地。縦二一・四×横一五・九糎。  
題簽 なし。

内題 「怪談雨之燈初編第四／素羅 玉香散人著／成林 新狸誹  
士校」。

版心 「怪談雨之燈卷之四 ○（丁付）」。

尾題 「怪談雨之燈第四終」。

匡郭 四周单边、縦一七・四×横一三・四糎（卷四）。

行数 本文八行（全卷）。

挿絵 卷四 八ウ・九オ

印記 なし。

備考 中野三敏氏旧蔵。表紙見返し右下に瓢箪の落書きあり。

以上、現状で把握している『怪談雨之燈』の諸本は三点であり、五卷五冊で揃っているのは三宅所蔵A本となるが、刊記はB本にのみ存する。また、初編とあるが、続編は寡聞にして知らない。

### 三、『怪談雨之燈』の作者・画工・書肆

『怪談雨之燈』の作者について、結論を先に述べると詳細は不明である。しかし、『怪談雨之燈』や『怪談夜半鐘』の出願や序の検

証により、吉備（備前）出身の人物であろうと思われる。

まず横山論考でも取りあげられた『享保以後大阪出版書籍目録』に、「怪談雨の燈」の作者として「玉香山人（心齋橋）」とあるが、『怪談雨之燈』序の末尾には「黄薇 玉香識」と記され、作者の玉香が吉備（黄薇）に係る人物であることを示している。一方、同じく『享保以後大阪出版書籍目録』の「怪談夜半鐘」の項に、

怪談夜半鐘 四冊

墨付四十六丁

作者 三村朱助（備前）

版元 塩屋権平

新板発行申出

右板元よりの申出でを本屋行事にて聞届け板行

申出年月 寛政八年九月

と、作者を「備前」の三村朱助と記す。『怪談夜半鐘』は江戸の

『割印帳』寛政八丙辰年十二月二日不時割印の項にもその書名が見え、それによると、<sup>注</sup>

寛政八丙辰年四月

夜半鐘 全四冊 耳学斎著

板元 大坂塩屋権平／売出 橋本権次郎

墨付四十七丁

と、著者を耳学斎としている。そしてこれも横山論考が述べたように、『怪談夜半鐘』の序には、「因著雨燈次以此編改号玉香」、「丙辰秋九月 旧号 耳学斎」との記載がある。すなわち、耳学斎は『怪談雨之燈』を執筆した寛政八年六月頃に玉香と号を改めた。そして同年九月の『怪談夜半鐘』の執筆では旧号の耳学斎で序を記し、さらに卷末評語を新号の玉香の名で著したと理解できる。以上の記述から、『怪談雨之燈』の玉香と『怪談夜半鐘』の耳学斎・三村朱助は全て同一人物と考えられよう。

『怪談雨之燈』の序では「余、嘗て宣父の怪力乱神を語らざるを怪む」（原漢文）と『論語』述而第七を話題にし、また巻四「丹波小女郎殺古狸」話では、『経史諸子百家小説』を修めた石部小三郎が「時の老儒先生」に憎まれ、冤罪で国を追放されるという展開になっている。本文には小三郎が「人に詔ひ世を渡る当世儒者の手段」を知らないと記され、これらを見ると、作者の儒学への関心と当世の儒者への批判めいたものが見て取れる。

近藤瑞木「怪談物説本の展開」が『怪談夜半鐘』について、

一卷では墮落僧、三卷では人間界に流謫された道人、四巻では似非儒者を扱っており、巷間の宗教者や学者に対する著者の問題意識が寓せられている。（傍線論者、以下同）

と指摘することとも通じていよう。玉香は儒者、あるいは儒学に関係する人物なのではないだろうか。

後に触れるが、『怪談雨之燈』と『怪談夜半鐘』はともに大坂の書肆塩屋権平が出版に携わる。そしてこの塩屋権平は、

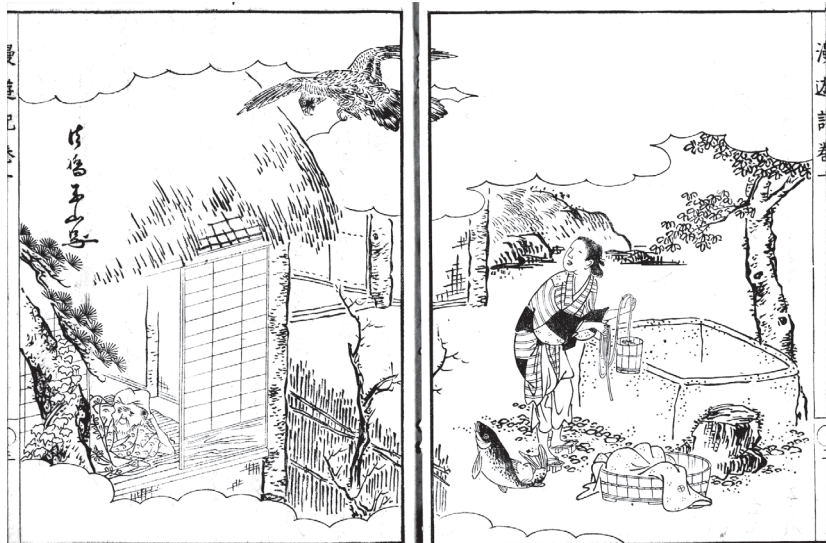
寛政八丙辰六月

訂斎夜話 全一冊 久米円次著

板元 大坂塩屋権平／売出 橋本権次郎

墨付十五丁

と、江戸の『割印帳』寛政八年辰八月六日不時割印の項にあるように、近い時期に久米訂斎に関する書を刊行する。久米訂斎は近世中期の京都の儒者で、崎門三傑の一人三宅尚斎に学び、程朱の性理説究明に優れた人物として知られる。想像をたくましくすれば、塩屋権平に儒者とのつながりがあり、玉香もその関係で両作品の執筆に関わった可能性があるかもしれない。



【図3】『漫遊記』巻一（2ウ・3オ）国文学研究資料館所蔵  
（ナ四・九一一一一）

また『怪談雨之燈』は作者の他に「新狸子」の校正が入る。この新狸子については一切情報がなく、どのような人物かは判然としない。著述に関わった二人について、引き続き調査を続ける。

次に画工についてである。前述の各諸本には、画工についての記載等はない。しかし、その根拠は不明なものの『改訂日本小説書目年表』に「李羅玉香子／石田玉山画」（作者は正しくは「素羅玉香子」とある。たしかに挿絵の図柄は玉山風であり、石田としたのは「文政九年刊」という時期から推測したものと思われる。石田玉山は岡田玉山に師事した玉峯（夢華）であるが、先述したように『怪談雨之燈』は寛政九年刊のため、この時期であれば岡田玉山であっても問題はない。

寛政一〇年一月刊の作品に建部綾足著『漫遊記』がある。本書には【図3】のように左部に「法橋玉山図」と記される挿絵があり（以下、『漫遊記』は国文学研究資料館所蔵本に拠る）、岡田玉山画と確定できるわけであるが、『漫遊記』の図柄と『怪談雨之燈』の図柄とで共通する箇所が看取できる。例えば、【図3】の一部である【図3a】の老人の顔は、『怪談雨之燈』巻四における挿絵の老人の描き方【図4】と似る。頬の角張った形、口角、額のしわ、顎髭などの描き方が共通していよう。他にも、『漫遊記』巻五の挿絵【図5】と『怪談雨之燈』巻五の挿絵【図6】では、ともに怪異の



【図6】『雨之燈』巻五



【図5】『漫遊記』巻五



【図3a】『漫遊記』



【図4】『雨之燈』巻四



【図11】『雨之燈』巻四



【図8】『漫遊記』巻五



【図7】『漫遊記』巻五

玉山画『漫遊記』



【図12】『雨之燈』巻四



【図10】『安達原』冊四



【図9】『安達原』冊六

玉峯画『絵本報仇安達原』  
(十四・一八五・四・六)

女性が描かれ、両者の構図が共通していることが見て取れる。左手の袖であごを隠し、また足を描かないことで怪異の女性を表現している。加えて、鬢の描き方や、見切れてはいるが女性に驚く人物の手も類似するのではないだろうか。

また、玉山と玉峯とで人物の鼻や耳の描き方に違いがあるように見える。『漫遊記』の男性【図7】と女性【図8】は、鼻筋をすっきりとした一本の線で描いている。だが、玉峯（蓼華）が描いた文亭箕山作『絵本報仇安達原』（文化四年刊。国文学研究資料館所蔵本に拠る）の男性【図9】と女性【図10】の図では、鼻翼部が描かれている。耳の描き方に関しても、『絵本報仇安達原』の耳の中が細かく描写される一方、『漫遊記』は簡素である。もちろん時期による違いの可能性もあるが、『怪談雨之燈』の男性【図11】と女性【図12】の鼻や耳の描き方を確認すると、寛政一〇年に描かれた『漫遊記』と似通う。これらをふまえると、『怪談雨之燈』の画工は岡田玉山と考えると差し支えないと思われる。

『怪談雨之燈』の板元は、『享保以後大阪出版書籍目録』で柏原屋重兵衛が出願していることから、この柏原屋が板元と思われた。だが、先に示した刊記によると主板元は塩屋権平のようである。塩屋権平は『怪談夜半鐘』の板元でもあり、この『怪談夜半鐘』と『怪談雨之燈』が同作者であることは既に述べた。すなわち、『怪談雨

之燈』と『怪談夜半鐘』とは、板元と作者とを同じくする、いわば姉妹本のような関係といえる。

これまであまり着目はされていなかったが、塩屋権平は寛政期の怪談本の出版に少なからず関わっている。寛政八年刊の波天奈志小浮禰作『怪談旅之曙』も塩屋権平の出版である。

『怪談旅之曙』は水谷不倒「選訳古書解題」に、「筆に迫力があつて、表現に巧みである」と賞され、前掲近藤論考でも「怪異描写が充実している」、「鬼の化けた女房と枕を並べねばならない夫の怯えた心理描写など、圧巻である」と評価される。しかし、大坂の『享保以後大阪出版書籍目録』には『怪談旅之曙』の名がなく、江戸の『割印帳』寛政八辰年五月八日不時の項に見える。

同四月

怪談旅之曙 全四冊 小浮弥撰

板元 大坂塩屋権平／売出 橋本権次郎  
同五十九丁

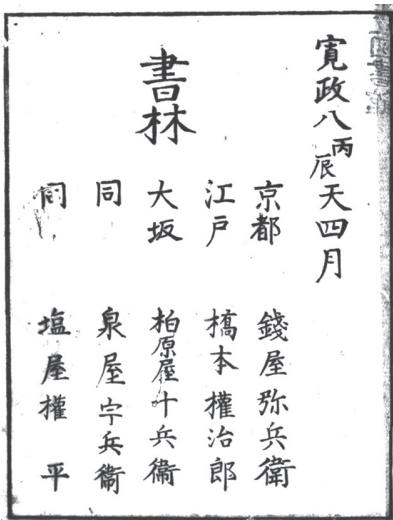
板元が大坂の塩屋であるにもかかわらず、江戸の『割印帳』にのみ記されるのである。なお、先述の『怪談夜半鐘』は『怪談旅之曙』と同じく、板元が塩屋権平、売出が橋本権次郎で、『享保以後大阪

出版書籍目録』にも出願の記載がある。気になるのは、大坂本屋仲問記録の『出勤帳十三番』寛政七年二月十四日の項に、

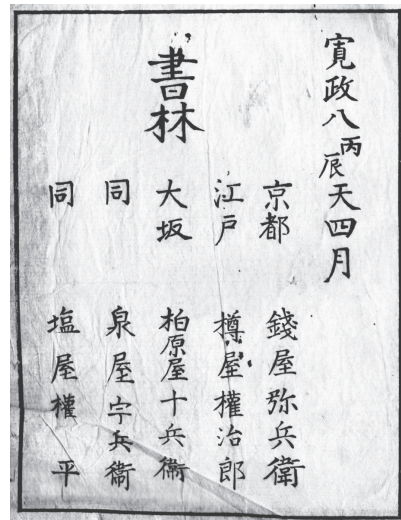
一塩屋権平より、怪談旅寝之時雨と申書願出候所、文中不埒二付願出来不申候

とあり、塩屋権平から出願された『怪談旅寝之時雨』なる書籍が「文中不埒」という理由で許可が下りなかったとされる。書名に「怪談旅」とあることから、あるいはこの『怪談旅寝之時雨』は『怪談旅之曙』の原型なのではないか。というのも、『怪談旅之曙』の諸本を見ていると刊記が二種類あり、一つが論者架蔵本の刊記【図13】のように「樽屋権治郎」とするもの、もう一つが大洲市立図書館矢野文庫本（五一―一九七）の刊記【図14】のように、「橋本権治郎」とするものに分かれている。摺りや字形などから「樽屋」の刊記が先で「橋本」の刊記は入本と思われるが、本文を比較すると興味深い例が見える。

『旅之曙』巻四、浮気性の娘が親に勘当され、親族を頼って山中を歩いていると大蛇と鬼に出くわす。木の上に逃げる娘を蛇が追いかけてくる。論者架蔵本において、当該場面の続きは次のように記される。



【図14】『怪談旅之曙』刊記  
(大洲市立図書館矢野文庫蔵)



【図13】『怪談旅之曙』刊記（論者架蔵）

ほどなく梢<sup>こすへ</sup>なりぬれば、「こ、をかぎりのいのちなり。飛おりん。」とうつふけば、件の鬼<sup>おに</sup>が下には口あき待っている。かなしや、しりへつきかゝり、赤き舌<sup>した</sup>にて玉門<sup>ぎよくもん</sup>をげそりくとねぶりかけ、鬼は長き杖<sup>つゑ</sup>に松の梢<sup>こすへ</sup>つきゆする。

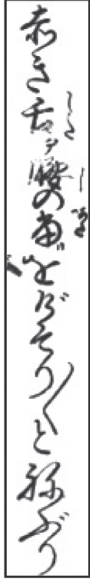
一方、「橋本」とする刊記の本では、この「玉門」の箇所が、

ほどなく梢<sup>こすへ</sup>なりぬれば、「こ、をかぎりのいのちなり。飛おりん。」とうつふけば、件の鬼<sup>おに</sup>が下には口あき待っている。かなしや、しりへつきかゝり、赤き舌<sup>した</sup>デ腰<sup>こし</sup>の当<sup>あた</sup>りをげそりくとねぶりかけ、鬼は長き杖<sup>つゑ</sup>に松の梢<sup>こすへ</sup>つきゆする。

となる。当該箇所の版面【図15】（論者架蔵本）と【図16】（大洲市立図書館矢野文庫蔵本）を見ても、修正が確認できる。



【図15】



【図16】

つまり、大蛇が女性に襲いかかり、陰部にあたる「玉門」をねぶるという表現が「文中不埒」と判断された。そのため大坂では許可が下りず、「腰の当り」と表現を改めた上で、江戸に販売の中心を移したと考えられるのではないだろうか。

ただし、刊記が「橋本」となっているにもかかわらず「玉門」のままの諸本もあり（大洲市立図書館矢野文庫本・五一―一九八）、引き続き書誌の詳しい検証を要する。『怪談旅之曙』が雑な造本をされていた可能性もあろう。だがいずれにせよ、『怪談旅之曙』には文中の表現や刊記の異なる諸本があり、「文中不埒」と認識されそうな表現が改められた形跡が確認できる。これらの営為を行ったのが大坂の書肆塩屋権平であり、この塩屋権平が断続的に『怪談雨之燈』や『怪談夜半鐘』を出版したのである。

このように、『怪談雨之燈』の刊記が判明したことで、『怪談旅之曙』や『怪談雨之燈』、また『怪談夜半鐘』など、塩屋権平が中心となり、江戸の橋本権次郎らとともに寛政八、九年頃に怪談本の出版に力を入れていたことがわかる。なお付記すると、『怪談雨之燈』を出願した柏原屋重兵衛も『怪談旅之曙』の刊記【図13】に名を連ねており、協力関係にあったと思われる。今後、寛政期の怪談の出版について検証していく際に、書肆の動きも念頭に置いておく必要があると思われる。

## 四、「怪談雨之燈」卷一の類話と相違

『怪談雨之燈』は五卷五冊で、各卷に二話を配す体裁である。詳しくは翻刻を参照頂きたいが、卷一の内容は既存に見られる怪談と共通した要素を持つ。以下、例として梗概を示す。

作州侯に仕える高木駒之助は家中に比類なき強者。屋敷を賜ることになり、要望を聞かれた駒之助は、郊外の山屋敷を所望する。屋敷は怪異が起きることで有名で、周囲が止めるのも聞かず、駒之助は母と暮らす。ある日、屋敷初めの祝いの準備中、

料理人が切った魚の頭から蔓が生えて花を開き、数百の瓢箪となったかと思うと、次々と落ちて元の切り身となった。また、明け方に得体の知れない女性が現れ、駒之助の母が驚くこともあった。ある夜、駒之助の屋敷に元の屋敷の主と名乗る大坊主が来訪、刀一腰を駒之助に渡す。駒之助が受け取るふりをして抜き打ちに斬りつけると、大きな音を立てて逃げた。駒之助は主君から褒められる。駒之助の屋敷では下女の小春が勤めており、駒之助の母も気に入っていた。駒之助がうたた寝をしていると、書に歌が挟まれている。駒之助は怪しみ、小春に城へ送

る手紙の代筆をさせたところ、歌の手蹟と同筆であった。駒之助は小春に母に許しを受けるまでは待つように諭す。ある夜、駒之助が厠に行くと、下から腕が出てきて陰囊を握る。すかさず刀で斬る。次の日に小春を起こしに行くと、右の腕がなく、般若の顔となって逃げ去った。その内に帰ってきた小春が文字は書けないと言う。これまでの小春は妖怪の変化であった。夏の日に駒之助が風呂に入っていると一団の黒雲がきて、雲の中から現れた大きな手が風呂ごと掴んで飛び立つ。駒之助は大木で手を打って北山の麓に落ちる。小春を探すと南の森の梢で死んでいた。その後、駒之助は力自慢をやめ、孔子の道を学ぶようになると、妖怪も出なくなった。

ここに登場する高木駒之助は、近世前期の武士で作州森家に仕えた、高木流の元祖として著名な高木馬之助註10をもじっていると思われる。和田烏江が著した随筆『異説まち／＼』註11に、

一森美作守殿家来高木右馬介、松本三平、河端八左衛門、三人の大力なり。又船頭の大力ありけるが、右馬介殿大力にて、我等が腕をねぢてもらい度と自慢しけるを、右馬介聞て、船頭の二の腕を心安く三五度ねぢ廻したるとぞ。

と馬之助が大力自慢の船頭を子ども扱いする様が記され、彼が「大力」であると強調される。随筆『武野燭談』にも「美作の士に、高木右馬助といふ大力の者<sup>注12</sup>」と記されており、馬之助といえは「大力」であると人口に膾炙していた。その駒之助の武勇譚として、空き屋敷で起こる怪異を描き出している。

この手の空き屋敷を舞台にした怪異譚は、『怪談雨之燈』以前の怪談にも見られる。例えば、未達作<sup>みだつさく</sup>の浮世草子『新御伽婢子<sup>しんおとぎぼうこ</sup>』（天和三年（一六一七）刊）『古屋剛』もその一つである。梗概を以下に示す<sup>注13</sup>。

九州の赤松某は勇猛の士。城の側に荒れ果てた屋敷があり、百姓に聞くと「化生」が出るという。赤松は主人に退治を命じられ、屋敷に移る。下侍四五人と夜が更けるのを待っていると赤松以外眠ってしまう。その時、「其長天井にひとしき坊主」が現れ、また明日の夜にやってくると告げる。翌日、法師が来訪し、自分が「此所の主」であること、赤松の「大剛」なることを褒め、「刀一腰」を引出物として渡そうとする。赤松は刀を受け取るやいなや法師を斬りつける。法師は庭に逃げだし、血の跡を追うと牛ほどの古狸がおり、斬り殺した。狸から受け取った刀を御前に披露すると、家老の秘蔵の刀であった。

空き屋敷に「化生」が出るという噂があり、現れた「坊主」が勇猛の士に刀一腰を与え、武士がその刀で「化生」を斬るなど、『怪談雨之燈』の展開をほぼ一致する。

また根岸鎮衛著の随筆『耳囊<sup>みみぶくろ</sup>』巻一〇「熊本城内」にも類話が載る。近時、菊池庸介「日本近世文学の中における「城郭の怪異」——版本や近世実録などの写本からうかがえるもの——」<sup>注14</sup>が簡潔にまとめた概略を引用する。

細川越中守の本国で召し抱えられた侍は、周囲が止めるのを聞かずに怪異の出る屋敷に住む。一人の男がやってきて、この侍が越してきたことによる難儀を訴えるが、侍は、拝領した屋敷であるからと出て行くことを断り、ここに男が住むのは認めるものの、人びとを驚かしたり化かしたりすることがあれば考えがあると答え、男を承知させる。半年ほど経ち、男が麻上下姿で現れ侍の屋敷の隅に、十間四方の土地を賜りたいと述べ、侍は承知し、普請も許す。その夜、木遣りの声など聞こえ普請をする様子がして、家内は恐れるが、侍は狐狸のせいと意に介さない。ある夜、男が普請の礼を述べに来て、侍を屋敷に招待する。屋敷には立派な取り次ぎの侍が三人出てきて座敷に案内、侍は饗応を受けさらに勝手に案内される。後に侍は、是より後

のことは化かされたと語る。広々とした立派な御殿に通され、そこで料理を食べ、手土産ももらって帰る。四五日過ぎて、男が供回りを連れてお礼にやってくる。男はお礼の品として、郷義弘の刀を差し出すが、侍はその刀で男を真つ二つに斬る。供回りは狸の姿を現して逃げ去る。役人の検分があり、男は時間を経て狸の姿を現す。侍が食べた料理は、男が城の台所に申しつけたもので、そこは城の二の丸であった。刀は主君の宝蔵に入っていたものであった。

ここでも、侍が怪異の出る屋敷に住み、その怪異の男が「刀」を差し出し、その刀で以て斬りつける。怪異の起こる屋敷に住むことを周囲が止める点や、渡された刀で怪異を斬りつける点で、『怪談雨之燈』と共通しているよう。

また、祐佐作『太平百物語』（享保一七年（一七三二）刊）巻五「能登の国化物やしきの事」には、

能登の国に「化物屋敷」があり、幾田八十八という「おこの者」が屋敷を所望して住む。ある夜、廁に行くと、下から長い毛の手が現れ八十八の尻をなでた。八十八がその手を引き抜き、戦って刺し殺すと年経た猿であった。

という話が載る。「廁」の下から手が出てきて体に触れるという怪異も、『怪談雨之燈』と類似する。

このように見ると、『怪談雨之燈』の卷一の話は既存の怪談を複数取り合わせたような内容となっている。しかし興味深いのは、既存の怪談ではいずれも狸や猿といった動物が怪異の正体であるのに対し、『怪談雨之燈』では怪異の正体をはっきりと記さない。屋敷に妖怪が出現するという噂を聞いた駒之助が、「某が居るからは、狐狸きつねだまは勿論もちろん、たとへ天狗にもせよ、第あやの中にて怪しき事はさせ不申。」と発言してはいるが、結局のところ怪異が狐なのか狸なのか、天狗なのかは不明であり、駒之助が怪異を追いつた後に、『力自慢を止めし文芸に志し、先王孔子の道に帰せしかば、是よりまた妖怪ようかいも出ざりしとぞ。』と締めくくられる。

すなわち、年経た動物が怪異の正体という類話とは異なり、「先王孔子の道」という儒学の道を志すことで、怪異は起こらなくなるのである。ここに既存の怪談と『怪談雨之燈』の内容とに大きな違いがある。

『怪談雨之燈』巻二では、書生の官蔵が狸を退治した後、女色を慎んで学問に励み「名儒」となった。また巻三では、儒者の石部小三郎が丹波小女郎とともに狸の怪異を退治し、後に「大儒先生」と呼ばれるという展開が描かれる。近藤瑞木「儒者の妖怪退治―近世

怪異譚と儒家思想<sup>注16</sup>」が指摘するように、桃溪山人著『怪談弁妄録』（寛政一二年刊）に「徳の備わった儒者は怪異に害されないという思想」が見出せるわけだが、『怪談雨之燈』においても、儒者あるいは儒学の道に入る人々が怪異を退ける姿が描き出されている。当時の儒者に対する寓意を感じさせるのである。

## 五、まとめと今後の課題

以上、寛政期の読本『怪談雨之燈』についての紹介、および周辺の状況について私見を示した。『怪談雨之燈』は従来言われていたような文政九年刊ではなく寛政九年刊であること、作者の玉香は備前出身で、担当した画工は岡田玉山の可能性が高いこと、主板元は寛政八、九年頃に怪談本の出版を手がけていた塩屋権平であることが、『怪談雨之燈』や『怪談旅之曙』『怪談夜半鐘』の序や刊記、大坂と江戸の出版物に係る記録などから明らかにされた。だが、推測に留まることも多く、巻一「高木駒之助為怪物所攫話」の類話については既存の怪談の影響を示したものの、全ての章段についての検証が叶わなかった。また、『怪談雨之燈』に看取できる儒者への寓意に関しても、検討を続けていく必要がある。

近藤瑞木「改題本考―読本怪異小説流行の側面―」<sup>注17</sup>によると、

改題本も含め、寛延期（一七四八―一七五二）から文化期（一八〇四―一八一八）にかけての怪異小説の出版件数は、寛政期が「突出」している。それは近藤論考が指摘するように、『戯作外題鑑』寛政四年の条に「此比より、世間の風俗街談等を綴る事お憚りし故、是等の作に移らるべし」<sup>注18</sup>と書かれるような寛政の改革に係る理由や、「安永頃より江戸で流行していた咄の会との関連や、怪異小説を精力的に出版していた江戸の上総屋利兵衛、京都の菱屋儀兵衛などの書肆の活動」なども考慮する必要がある。そしてさらに、本稿で述べてきたように、怪異小説流行の末期にあたる寛政期に江戸から離れた大坂で出版された新作の怪談三作（『怪談旅之曙』『怪談雨之燈』『怪談夜半鐘』）、そしてそれを出版した塩屋権平の存在も、寛政期の怪談を考察していく際の一つの視点となるのではないだろうか。今後の課題としたい。

なお、見解や翻刻に関して誤解や誤読もあると思われる。ご批評を頂ければ幸いである。

## 注

（1）山崎麓編集・書誌研究会改訂『改訂日本小説書目年表』

（ゆまに書房、一九七七・一〇）。

- (2) 『読本の研究—江戸と上方と—』(風間書房、一九七四・四)。
- (3) 復刻版『享保以後大阪出版書籍目録』(龍溪書舎、一九九八・五)に拠る。
- (4) 『水谷不倒著作集』六(中央公論社、一九七五・一)に拠る。
- (5) 朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 新訂版』(臨川書店、一九九三・一二)に拠る。
- (6) 『西鶴と浮世草子の研究』二(笠間書院、二〇〇七・一二)。
- (7) 『国書人名辞典』二(岩波書店、一九九五・五)「久米訂斎」の項を参考にした。
- (8) 『水谷不倒著作集』七(中央公論社、一九七四・一〇)に拠る。
- (9) 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』二(大阪府立中之島図書館、一九七六・三)に拠る。
- (10) 綿谷雪『増補武芸小伝』(歴史図書社、一九七一・二)における記述を参照。
- (11) 『新装版日本随筆大成』第一期第一七卷(吉川弘文館、二〇〇七・一〇)に拠る。本書の解説によると、
- 旧刊本の凡例には関宿藩の家老木村正右衛門から、水戸の小宮山昌秀(楓軒)に充てた書翰を掲げて、其の内容と人物を説明して居られるが、誠に当を得た処置と思うので、今又凡例より此を引用する。
- 此異説区々と申書二冊、御笑種に入貴覧申候。御一覽も相済候はゞ御返却可被下候。是は四五十年前以前、藩中和田庄太夫と申者随筆に御座候。文学は河口三八門人、書は細井次郎太夫門弟に御座候。随分其比の諸名家之者、度々出会仕候由御座候。何か一向埒も無之事共出傍題に相認候随筆に御座候。御閑暇之節御笑種に相成可申哉と奉存候。尤私亡父写置候而、乱書誤写多、御覧も御面倒に可有御座候哉与奉存候。尚万緒期重便候。頓首。
- 文化十癸酉二月十四日
- とあることを信ずれば、寛政期以前にこの手の話は成立していたと考えてよいであろう。
- (12) 国史研究会編『国史叢書』(国史研究会、一九一七・一)に拠る。
- (13) 湯沢賢之助編『新御伽婢子』(古典文庫、一九八三・六)に拠る。
- (14) 『説話・伝承学』二八(二〇二〇・三)。

(15) 国書刊行会編『徳川文藝類聚』四(国書刊行会、一九七〇・九)に拠る。なお本作についても、注(14)の菊池論考が「豪胆な主人公が怪異を暴き退治する」話の一つとして触れている。

(16) 『日本文学』五五―四(二〇〇六・四)。

(17) 『読本研究』一〇―下(一九九六・一一)。

(18) 国文学研究資料館蔵本(ナ四―四九一―一―四)に拠る。

#### [附記]

本稿を執筆するにあたって、ご教示頂いた服部仁氏、服部直子氏、大塚英二氏、中村綾氏、洲脇武志氏に、また図版の掲載を許可して頂いた諸機関に心より感謝申し上げます。なお、本稿は愛知県立大学学長特別研究費「寛政期怪談の成立と受容に関する基礎的研究」、JSPS科研費、基盤研究(C)(20K00326)の助成を受けた成果の一部です。

#### 【凡例】

・底本は論者架蔵のA本に拠り、刊記のみB本を用いた。  
・論者架蔵のA本・B本ともに、巻三の三丁と四丁が逆に綴じられていたため、翻字では正しい順に改めた。

・旧字体や異体字は新字体に改めたが、書名の「燈」のみそのままとした。

例) 恠↓怪 燈↓灯 従↓從 傳↓伝 咏↓詠 哥↓歌  
證↓証 聲↓声 廣↓広 哀↓貌

・「分」は「より」に開いた。

・読み易さを考慮し、句読点や濁点、カギ括弧を付した。

・送り仮名と重複しているふりがなは省略した。

・空白の箇所は□で示した。

・文脈に疑問がある箇所には横に( )を付した。

引用や翻刻した本文には、現代の人権意識にてらして不適当な表現があるが、原本の歴史的、資料的性格に鑑みて、本稿ではそのままとした。諒解されたい。

雨之燈序

余嘗怪宣父不語怪力亂神而春秋二百四十二年間何其怪力亂神之多也丘明亦親在其時傳其經而附益之不少是時傳其經而附益之不少是時傳其經而附益之不少

者亦可怪矣... 惟氣少能怪... 惟於人... 之一大怪... 之事實... 是也... 黃薇 玉香識

【序】卷一（1オ・1ウ）

【翻刻】

雨之燈序

余嘗怪宣父不語怪力亂神而春秋二百四十二年間何其怪力亂神之多也丘明亦親在其時傳其經而附益之不少是知古所謂語云者誨人之謂已怪何不尽夫物不自怪從人怪之向謂之怪則其怪之者亦可怪矣

黃薇 玉香識

怪談雨之燈目錄

- 第一 高木駒之助為怪物所搜話
第二 諸生官藏刃古狸話
第三 丹波小女郎殺古狸話
第四 魅屋才藏為稻荷神所擁護話
第五 磯嶋忠三郎為幽靈懇報仇話
目錄畢

怪談雨之燈 初編第一

素羅 玉香子著

成林 新理子校

高木駒之助為怪物所攫話

むかし、作州侯の臣に高木駒之助といふ者あり。生れ得て勇猛にして、力數十人を兼、又武技に堪能にして、十八歳の時は既に自ら高木の一流をつかひ出し、家中の若者に師と仰がれ、並ぶかたなき名人の聞ありしかば、作州侯感心まし、加祿を給はり、殊出精すべきよし申附られる。

爰に、城北に當つて一ツの山第あり。しばし妖怪有をもつて久しく明やしきとなり、昼とても此内へ入る者なし。駒之助此度立身して、屋敷をねがふべきよし、用人中より申渡されしかば、駒之助つら／＼思ふに、「山下の間とて物静かならず、自然と芸道の妨にもなれば、何とぞ彼山第を拝領せん。」と願ひければ、母君は兼て妖怪の沙汰を恐れ給へば、「何とぞ山下の住居にせよ。」と再三申されけれども、駒之助承引せず、「かの妖怪、幾とせる大切なる武士の屋敷を召とり、世の妨をなすこそ奇怪なれ。又妖怪を恐れては武士の風上にもおられぬ。なれば、気味悪く思ひ給ひそ。某が居るからは、狐狸は勿論、たとへ天狗にもせよ、第の中に怪しき事はさせ不申。」とて、既に願ひも聞届ありければ、職人

なども恐れぬらんと、駒之助日々修復の手伝に行て、自ら木石を運び庭の伐込などして、毎も七ツには仕舞はせける間、職人も大に甘き、修復もはかどりて、其間何の怪しき事もなかりける。

既に作事も成就しければ、吉日を択び、頭に届けて、彼山第へ移りければ、門人并に親類悦びとして酒肴を贈りければ、駒之助も、「此度は屋敷初めの祝ひなれば。」とて、山海の珍味を調べ、親類門人に案内して、明日は早朝より来駕なりと、掃除を仕立、勝手には献立の工面料理の最中なるに、料理人魚の頭をきつて庭へはね捨けるが、忽魚の頭より一の蔓生出、「これは不思議」と見る内に、次第に生へのび、終に梁にもつれ付、花を開て画がごとし。見る内に数百の瓢と成て、梁より下へ垂れしかば、皆々仰天し、急ぎ駒之助に斯と告げれば、座敷より飛で出、飛掛らんとすれば、数百のひやうたん皆地に落て庭へ広がり、潰れたるを能々見れば、宵より拵おきたる切味なり。

駒之助大に怒りけれども詮方なく、「おのれ、今一度頭はれてみよ。鬼神にもあれ、目に物見せん。」と独り言して、扨俄かに魚を買ひ、又切味を仕立て、皆々臥けるが、翌朝ほのくらきに、けふは早朝よりの客なれば、母君まづ起給ひ、勝手の方へ出給へば、おそろしや、其長五丈もあらんと思ふ女の、かみをさばきて内庭に座し、母君に向てにこ／＼笑ふを見て、「アッ。」と一声叫びて、暈

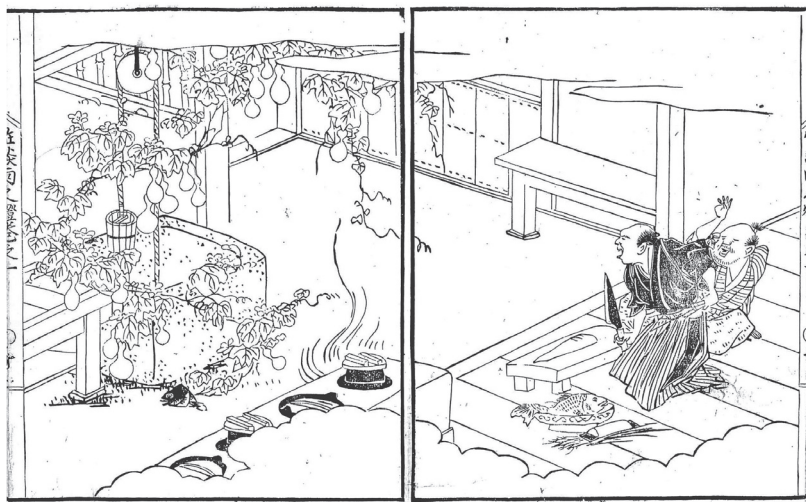
倒し給ふに、皆々驚きおきあがれば、駒之助走り出、妖怪に飛か、れば、窓の隙より烟の如くに成て外へ出るを、戸を蹴外して追かくれば、一ト村の雲と成て北山をさして散失たり。

内へ入て、夜前の料理を改るに、少も残らず皆明きがらに成たり。駒之助じだんだふめどもせんかたなく、母君はこれより恐れ給ひ、「一刻も早くわがさとへ遣はしくれよ。御身もまたかゝる所に必ず居給ふな。」と宣ふにぞ、早速今朝の客へ使を遣はし、延引の段断りし。夫より僕と婢を添て、母のさとへ預け、今は駒之助一人残り、水を汲、飯を炊きて、「何とぞ再び妖怪に出合さん。」と拳を握り、牙をかねて日を送りけるが、或夜、初更の頃に門を叩く者あり。「何者なるぞ。」と咎むれば、「イヤ、苦しからざる者なり。此第の旧の主なり。」といふ。駒之助それと噓り、得々其様子を見て仕課せんとおもひければ、「コレハ御苦勞千万。」と挨拶して、戸を開き内へ通しけるに、其長八尺ゆたかの大の坊主、眼の光り旁を射て、左に女の生首を提げ、右に一つの箱を挿んで爐の辺りに座り、駒之助が日頃力自慢にて拵（へ）おきたるかけ目三貫匁の火箸をば杉楊枝を遣ふごとくに持て、背を掻ながら、「規、其方は能も此屋敷へ来たり。悦びかたぐ、夜陰ながら参りたり。」といふ。駒之助心を引見んと膝立直し、「昨今に移宅して祝ひに悦ぶ内へ、いまくしき生首を持参あるは、武士を武士とも思

はぬ天殺奴。ソコ動な」ときめ付ければ、坊主打黙き、「これは誤り。今宵夜食にせんと下野の国奈須野、迎にて拔たる首なるが、外におきては犬に獲れんと、無礼を忘れて携たり。御免あれ。」と袖へ入、彼箱より刀一腰とり出し、左少ながら悦びの印と差出せば、駒之助又怒つて、「武士に刀を授るに鞭を先へ出す法やある。弥々無礼なり。」といへば、坊主、「いかさま是も尤。」と取直して差出すを、請取ふりにて抜打に斬付れば、家も崩る、が如き声して、天井を漸破り逃れたり。

駒之助少しは腹をいせ、火をとほして吟味するに、築山の大木へ登りたりと見へて血をひきたり。翌朝みれば、北山の方へ血の雨ふりたるごとく、一里ばかりの間草木の葉を染たり。捉彼持参したる刀をみるに、駒之助が差替なり。作州侯此事を開給ひ、大に褒美まし、家中の人々も、「さすが一流の元祖ほどありて、能もしたる者哉」と誉め人はなかりけり。

斯て、妖怪既に治りたりと聞へければ、母君も里より帰り給ひ、上下安心して暮しける。此歳、ひとりの婢を抱へけるに、容顔人に勝れて又貞実いふばかりなく勤めければ、母君の氣に入り、「幾とせも我内に勤めよ。往々此方より仕立て、家中の軽き者へなりとも嫁がせん。」と骨肉のごとく愛せられけるが、或時、駒之助城より下りて暑さにつかれ、座敷に仮寝して居けるを、風ばしめ



【挿絵】 卷一（9ウ・10オ）

すなとふとんを覆ひ、側なる硯にて一首のうたをかき、読かけし書の間へ入置けるを、駒之助は夢にも知らず、既に寤て又書を引寄みれば、切紙に、

なまなかにおもはぬ人をおもひけり

はなのさくころ夢に見しより

駒之助驚きて、「たしか先程までなかりしに、此歌の仮寝せし間に入おきしは、主は誰ともしらねども、我を恋ふるの情は詞の外にあらはれたり。山第のことなれば、外より入来る者はあらじ。婢の小春が入おきしか。さもあれ手跡といひ歌といひ、彼がしはぎにはよもあらじ。」とおもへば、なを疑はしく小春を呼で、たばこの火を入させ、「扱々けふは疲れたり。城内へ書を遣ふと思へども、暑に堪かね書ことも大儀なり。其方代筆せよ。」と、紙と硯を差つければ、「畏り候。」と筆をとり、認るをよくくみるに、以前の歌と同筆なれば、駒之助大に感じ、もはやうち明ていはんとせしが、「藝道に志すものは必ず悪魔に見入らる。」と聞く。世のなかに女色に過たる悪魔はなし。殊にばけもの屋敷なれば、万一是に乗じて再び禍をなさんこともはかりがたし。」と、小春をち（か）く呼びよせ、「最前は浅からざる志。忝し。下賤に似合ぬ和歌の道に心をよせること奇特也。今士の妻をみるに、三弦鼓弓に日を送り、万一君の御馬先に立べき武士の道にくらく、況して我

国風の三十一文字も目くらのかきを覗くにもおとり、畢竟容貌が士の妻のみ、実は其方におとりぬる風俗、おもしろからぬと覚悟して、我も妻をば迎へざるなり。さればとて我も岩木ならねば、何とて其方が志をむげになす所存にはあらず。母へ願ひし上にては許をうけて、我やどの床の花とも詠んことあらんもしれず。かならずしも難面ものとおもふべからず。」と、日本無双の大力も心の優にやさしきこといふべからず。小春は双臉紅葉して、「在所女のいやらしとおしかりをうけて、死ぬばかりとおもひ切てさし上し腰折、うたのいたづらをかくまで厚き御こと葉、死とも忘れ申さず。」といふ。

駒之助、あまり珍らしき女なれば、いよく不審に思ひ、ふかく用心しけるが、小春は次第に面疲れ、人なきおりはさしうつぶき、物あんじげなるありさまなりければ、駒之助も不便におもひ、「今しばらく見あわして、いよく心によこしまなきことをみば、我とてもなどいなむべき。」ととりわけ念頃に召仕ひけるが、或夜、夜半の頃かはやへ行しに、下より手を延して駒之助が陰囊をとる。素より早速の手利なれば、さし添逆手に抜よりはやく、腕首よりかき切て立出みるに、夜叉のかひなのごときおそろしき爪のびて、毛は白がねの針の如し。「此事、若母君の耳へ入なば、又もや恐れ給はん。」とひそかに庭中の土中に埋めおきて、翌朝何心なく起て、毎

ものとはりに小春を起しければ、「夜前より頭痛いたし候へば、しばらく御免し下され候へ。」といふによりて、駒之助氣遣はしくおもひ、部屋へ入脈をみるとすれば、忽がわとおきあがるは、般若の面の如くなる恐しき姿と成て、右の腕は斬れながら左の手にて攫みかゝるを、引伏んとすればおとりあがり、胸の辺をはたと蹴るを、左にひらゐて丁どうてば、窓をおし破りて逃失ける。

母君物おとに驚き、駒之助をよびて尋らるゝに、止ことを得ずして一々に申せしかば、いよく恐れをなし給ひ、「さりながら、小春は遠国浪人の娘ときけば、かゝる妖怪にては有まじ。」と宣ふうち、小春いきせき門外より立帰り、「御返事は追付これより申さん、との御事にて候。」といふ。「何として何方へ行しぞ。」と尋るに、小春あきれたる顔色にて、「コハ何をか云給ふ。晩方に寝所へ召れ、御状をもつて御さとへ参るべきよし、厳しく仰られ候故、こはく参候。」といふ。其状の上書は誰の手なるやと問ふに、「生れてより文字は存じ不申。」と赤面して申ければ、弥奇異の思ひをなし、「扱は是まで妖怪のしはぎにて、歌など詠しよ。」と身の毛もよだつばかりにぞありける。

此日は夏のことなれば、裏の藪影に風呂して、駒之助夜前よりの草臥を休めんと何心なく入けるが、晴天忽雲覆ひ、一陣の風ふくやいなや、車軸を飛す雨と共に一搏の黒雲飛来り、雲の中より

龍のごとき手を延して、風呂をつかんで虚空にあがるを、「心得たり。」と大木の梢をとつて引止んとすれば、さしもの大木根ごしにぬけて、既に大空にあがりける。駒之助今はせん方なく、抜たる大木取なほして、鉄壁も砕けよと重ねうち打ければ、風呂を放して引去たり。駒之助はるか北山の麓へ落けるが、早業の男なれば木の枝にとり付、無難に吾内へ帰りしかば、母君大に悦び給ひぬ。

然るにまた、小春が行方しれず、所々を尋ねさがしけるに、遙南の森の梢に手足を引裂かれてかゝり居たり。駒之助弥不便におもひ、厚く葬り祭りける。其後、力自慢を止めし文芸に志し、先王孔子の道に帰せしかば、是よりまた妖怪も出ざりしとぞ。これを以て高木の一流もまた、一時諸国にさかんにおこなはれけるとぞ。芸術に心がけあらん人はこゝろへあるべきことなり。

### 怪談雨之燈第一終

### 怪談雨之燈初編第二

素羅 玉香散人著

成林 新狸山人校

諸生官蔵刃古裡話

昔し、芳野の里に官蔵といふ諸生あり。天質病疴にして、及第

の業もはか／＼しからざりしが、一日山ひとつあなたへ行とて、百丈が坂を越しかゝりけるに、坂の半ばに山桜の春しりがほにさき乱れて有ければ、石に腰うち掛け暫く詠め入ける。

おりふし、こなたの谷より歳の頃九十有余の老人、鳩の杖にすがりて躰ひ来たり。官蔵と同じく花に詠め入たる躰、なか／＼尋常の人とは見へず。官蔵一揖して、坂を登らんとす。老人の曰、「我も此坂を越て行所あり。一樹の影も他生の縁と哉覧、何とぞ我を背おみて、此坂を越し給はれ。」といふ。官蔵は我身だに越かぬ弱き男なれども、老人の言葉はいなみがたく、背をうけて、「いざ、せ給へ。」といへば、老人大に悦び、官蔵が背におはれるに、其重きこと大盤石の如にして、なか／＼おふべきやうなかりければ、老人笑て、「さらば軽くなるべし。」と云けるが、いかなるゆへにや、忽に小児を負たるよりも軽くなる。官蔵ふしぎのおもひをなし、既に坂を越けるが、老人大に喜び、「聊礼を申さん。」とて、官蔵を石上へ招き、天を仰いで呪文を唱へ、石に向て氣をふきかけしが、忽玉の盃を吹出し、次に又玉の尊をふき出し、又一人の童子を吹出し、酌をさせて官蔵に酒を進む。官蔵不思議におもひながら一盃を傾けしが、甘露もしかぬ其味ひ異香芬々として、五臓忽ちつよきことを覚へ、勇健の氣漸くに生ず。老人又呪文を唱へ、大なる鯉を吹出し、童子に命じて膾とせしめ、官蔵に進めて又

酒を強けれども、既に大に酔て辞退しければ、老人、「しからばとり申さん。」と又ことごとく取て呑み、官蔵に向て曰、「孺子此酒を飲で婦人に心を迷さずは、寿命かならず長くして、名を末代に流すほどの大儒と成べし。若又色に迷ひ、香にめで、此ことを忘れなば、身の行末は花のごとくちりては朽て果ぬべし。かならず荒むことなかれ。」といふかとおもへば、妾かたちは消失て、只あやしげなる匂ひのみ山風にふきちれば、官蔵奇異のおもひをなし、古へ漢の張良が黄石公に逢たりし圯橋のむかしも思ひ出られて、これより老人の言葉を守り、終にあらゆる書を読むに、破竹の勢奮ならず。数月の間に、經史子集四部の書を誦じ、又容貌も奇麗になり、自然に大宮人の風備りける。

爰に南部の顕者に、高向の白人といふものあり。独りの娘を具して吉野に遊び、春の行衛を惜みて、しばらく滞留しける。娘は蘭とて十六歳になりけるが、素より風雅の家に育ちければ、和歌の道にも賢く、心やさしくしてかほかたちも世に勝れしかば、殿上人を初とし、若とのばらより心をかけ、千束の文の重れども、蘭敢て手にも触れず、かぐやまとの文をよみ、烈女の操をしたふ故、弥みやこをかたづけ、る。蘭よしのにてよめる。

香をとめし芳野、やまの白雲は

いくさとおちのはるをしむらん

此歌集には見えざれども、今に至て人の口碑にいちじるし。

ある日、蘭山より帰るさに、むぐらしげれる賤が屋に、甘ばかりの幼年の竹の窓をなかばおして書を読んで居けるが、蘭は一目見るよりおもはずつまづきて、脛を石にいためければ、しばらく立よりて休らひける。蘭は足の痛もおほへず、只官蔵が容貌にみとれて恍惚として、自ら失するが如なるは、伴の者はそれともしらず、足の痛ならんと、「是より駕籠にて帰らせ給へ。」と勸めて、宿所へ伴ひ帰りける。

翌日はいたづきもなおりしと、又うちつれてかなたこなたとうちありき、昨日の礼にかこ付て、官蔵が内を尋けれども、折ふしけふは留主なりとて、老女の一人在ければ、本意なげに立出て、桜の小かげに寄りこぞり、暫らく爰にて筍ひかんとて、石上に甞餚うちしきて、想夫恋の曲をぞ弾じける。抑想夫恋へおつとおもふ恋の曲にて、いにしへ杞梁が妻、夫を慕ひて作りたる盤渉調の曲なるを、これは蘭心ありて弾ずることをしらず。こしもとなどはおかしくもおもはざりける折ふし、官蔵は隣村より帰りかけ、きけば妙なる爪おとに、おほへず足も立とまり、見やれば向ふの桜が下に、梨花一枝雨を帶たる粧ひにて、物おもひげなるすがたして筑紫琴をかきならすは、いとやんごとなく覚へて、行も衛やらずいむを、蘭はふと見付、おもはず琴の手も乱れ、見かはす顔に官蔵も、昨日の

痛みを問はんものと桜が元へ立よれば、花のふぎに非ずして、かほにながる、紅葉もみぢはの、色香いろかを包む蘭らんが、酒でもあきやと其あとには、まづくしばしは胸むねばかりに、ひとり夕日ゆづりのまばゆくて、顔かほをおへば、露つゆばかり御礼ごれいの印しるしにつきしが、一献いけんの酒をす、むるほどにぞ、官蔵くわんざうも興けうに入、おさへるかさねる相生あいせいの松まつの契ちぎりの初と成、互たがひに心うきはしの渡わたらんとよりと、官蔵くわんざう戯たわぶれにまぎらして、

まなかに松風しょうふうならは琴ことの音に

通とほはんものを花の下かへかけ

と詠よめじ、「かゝるひなふりも却かへて興けう。」と蘭らんが前に出せば、かほそむけ食くわへる袖そでのひまよりもかみとり出して、斯かくばかり、

松風を君とおもへばことのねの

もつる、おもひひくにひかれず

と返かへしの歌を見るに付、今はあやしき老人らうじんのいましめをもうち忘れ、互たがひにかひらうどふけつの心と心がいだきあひ、いはぬことばかいふよりも、ふかき情なさけぞこもりける。日もはや西山さいしんにかたぶきてければ、かねにちりゆく花と、もに、すがたばかりは引わかれ、おのく宿所しゆくしょへ帰りける。

官蔵くわんざうはまどの下、見残みのこしおきたる女才子にょさいし書かてうゑんかうが伝でんをかへし、おもひ合せ身のうへにおほへず、いたく更けるが、忽たちちほそ戸とを叩たたく声こゑに、「誰たぞや。夜よふけて何事なにぞ。」と戸とをおし明あれば、

蘭らんがふるいわなく官蔵くわんざうが袖そでにすがりて入ければ、「コハ何としてか来きたり給ふぞ。」と氣遣きづかいすれば、蘭らんは、「おまへをしたひ忍しのび出て、くらさは暗くらし道みちはしらず、まよいまよふてやふく」とこゝへはまひりさむらふなり。申も今は恥はづかしきことながら、わらは、南都高向なんとたかきの白人とんぱんが女むすめにてさふらふが、いとけなきより烈女れつじょの操みさおを慕したひ、いかにもして天下てんかの英雄えいゆうに身をよせ、赤紫あかむらさきの筆ふでの跡あとをもしたはんと、年月望げんげつぼうみ侍さむらいひしか、きのふはからずそなたさまを見奉り候に、雲うへの上うへにもまたとなき姿はさらに慕すがたはねど、つたまく窓まどにふみをよむ人の心のおくゆかしくけふの歌をば返せしぞや。親おやのいかりは恐れけれど、叶かなふ願ねがひの嬉うれしさをかならずさまして給はるな。」といふを、表おもてに立聞たちきこせし家来けらいどもが声こゑく、「蘭さま、早くおかへりあそばせ。さきほどから殊ことないお案あんじ故、里中さとぢゆうがさわぎ立て、お尋たづね申ております。」といふに、二人は消入きへおもひをなし、「いかゞはせん。」と狼狽うろうたるを、あらけなくも乗物のりものにおし入れて、宿所しゆくしょをさして急いそぎ行ば、官蔵くわんざうはあるにもあられず、「いかなるうき目にや逢あぬらん。」と跡あとをしたひて、白人とんぱんが宿所しゆくしょの庭にはへ忍しのび入、様子やうすを聞きどもさだかならず。

「女の忍しのび泣なみの声聞こゑきこゆるがときは、今は縄なわにてもかゝりしにや。我われゆへ斯かくるうき目にあひ、苦くるしむ人の心根こゝねをおもへばく、其むかし百丈ひやくぢやうが坂さかにて老人らうじんの我身われみの上うへの誠まことを忘わすれて、今は行末ぎやうまつのち

り行花と成果るが、さては是非なきうきよや。」と腸を断おもひをなし、「何とぞして、かはなりとも見て別れん。」と、戸の隙よりさし覗けば、「何やら物おと物念也。家来どもせんざいに心付よ。」と白人が詞は、釘をさすごとく忍び出る足おとに、はたして盗の入込しと上下立騒げば、虎の尾をふむ心地して、やふくのがれ立帰れ、寝てもねられぬまどのうち、山ほと、ぎすなきあかす。これや諸生の道ならぬ、恋のした道迷ひ道、みちある世にもこればかりは、わき道お、きこみちなり。

扱も高向の白人は、娘がごとくに興をさまし、あみ乗物に引添て、南都をさして立帰る。いかなれば故郷を出し、おりからは花に吟し月に嘯き風雅の旅と悦びしも、楽極り悲みの斯ること、はおもひきや。蘭は只、「涙川ふちと成ぬる我恋の、かくあるべきと露しらば、よしや芳野、川みづに身を捨おぶねとならんものを、生て甲斐なき身の上と心でいへど、恋る人の何とてけれとおぼすらん。親の教は背けども、貞女両婦にまみへずと、枕かわさぬ人なりとて、心と心がむすばふれ、いかでかはなれ、又外のおとこにそふは畜生の身の行ひがなるべきや。いつそ殺して給はらば、かゝるつらきは有まい。」と口説も心ひとつにて、既に我家へ立帰れば、白人は奥方にしかくのよし物語り、蘭を一間へおしこみ、いたくせつかんせしほどに、次第に病おもやつれ、巫山の雲のたへぐに、笑

蓉のかほばせ、今はや枯野に出る夕月の半はかけし如くなれば、白人も驚きて、俄に医薬手を尽せど、風をも待ぬ冬の葉のちりなん頃となりける。

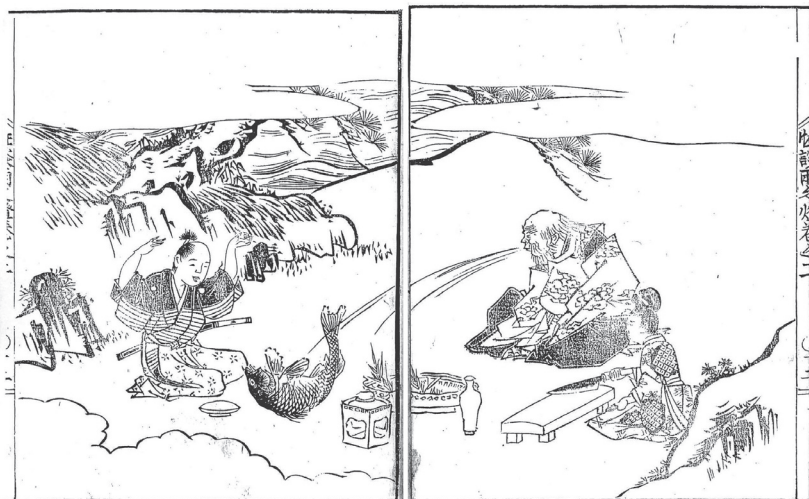
あら、ぎは、病のひまにかゝみとふでを取寄て、「わがおもかげをかくばかりかわりはてたるかんばせを、恋しき人の見しならばさぞやさめなん。紫き花すり衣ひきかへて、京かたびらをまどはん。」とおもへば、筆もまはりかね、よふくに書写し、一首の歌をぞ題しける。

とてもその人にまみへぬ身なりせは

仮の浮世をいかで過さん

既に歌をかきおはり、筆投捨てねふるがごとく終にはかなく成にけり。夫婦は大に後悔し、「斯なるごとくしるならばいかにも謀のあるべきに。」と悔めど、甲斐なく涙ながら野辺のおくりを営みて、「さて臨終に画きたる其おもかげと守り袋はこがれし人におくりなば、さぞ未来にても恨むまじ。」と芳野、里へ送りける。

さて吉野、官蔵は、我身を忘れ蘭がさぞ苦しみをうけぬらんと、昼夜心を痛ましめ、是も病となりけるが、ある夜の夢に蘭は、涙の袖よりかみそりを取り出し、「とても添れぬかなれば、アノ世で待ん。さるにても、此黒髪を剃おとし、成仏さして下さんせ。身まかりしときおやたちの、悲しきあまり其まゝに、かみをはし



【挿絵】 卷二 (12ウ・13オ)

て葬<sup>はうむ</sup>りしが、今は後生<sup>ごせやう</sup>のさはりと成<sup>な</sup>、迷<sup>まよ</sup>ふもひとつはわがせこへ、  
 きるにきられぬ恋衣<sup>こひぎ</sup>、ふびんとおもひ給はれかし。ちかきうちね。」  
 といふこゑして、あかつきの風物<sup>ふうぶつ</sup>すごくあんどうの影幢々<sup>かげどう</sup>と光り<sup>ひかり</sup>を  
 分けしかみそりのかたへにあるは、「扱<sup>さて</sup>は魂魄<sup>こんぱく</sup>我が家へしたひ来り  
 しが、おもへばく起<sup>おき</sup>てみつ寝<sup>ね</sup>てみつ蚊帳<sup>かや</sup>の広<sup>ひろ</sup>さ哉<sup>や</sup>とながめし人に  
 引かへて、遠<sup>とほ</sup>き雲井<sup>くみい</sup>をながめやり、永<sup>とこ</sup>きよを一人なし、心ばかりに  
 あふ恋の其人<sup>そのひと</sup>さへも今はや六<sup>むつ</sup>のちまたに赴<sup>おもむ</sup>きしが、我とても今  
 更<sup>さら</sup>に独<sup>ひとり</sup>残りて何にかせん。近<sup>ちか</sup>き内<sup>うち</sup>にといひ残せし、其言<sup>そのこと</sup>の葉<sup>は</sup>のた  
 がはずば、諸<sup>もろ</sup>ともに自害<sup>じがい</sup>して果<sup>は</sup>なんもの。」と幽明<sup>ゆうめい</sup>の道に少しもく  
 らからぬ、あつばれゆ、しき学究<sup>がくきゅう</sup>も、あどなきことを思ひ出<sup>だ</sup>すは、  
 これなんから国の迷魂陣<sup>めいこんじん</sup>に陥<sup>おち</sup>りし、むかし語<sup>かたじけ</sup>も今こゝに、おもひ合  
 していたはしき。

さる程<sup>ほど</sup>に日<sup>ひ</sup>を経て、南都<sup>なんと</sup>の使<sup>つか</sup>至<sup>いた</sup>り彼<sup>かの</sup>一封<sup>ふう</sup>をさし出せば、官藏<sup>くわんざう</sup>  
 よくむせび入<sup>い</sup>り、ひらけばきのふ見<sup>み</sup>し夢<sup>ゆめ</sup>のすがた容<sup>かたち</sup>を写<sup>うつ</sup>し画<sup>え</sup>の、生<sup>い</sup>  
 るが如<sup>ごと</sup>きは神<sup>かみ</sup>を止<sup>とど</sup>めて、「我<sup>われ</sup>に逢<sup>あ</sup>つてか一首<sup>いっしゆ</sup>のうたは貞烈<sup>ていれつ</sup>の操<sup>みさね</sup>を残<sup>のこ</sup>す  
 水荃<sup>みづくさ</sup>のあとに残<sup>のこ</sup>りて、此<sup>こ</sup>やふに悲<sup>かな</sup>しきことを見るものか。」とさめ  
 ぐと泣<sup>な</sup>けるにぞ、南都<sup>なんと</sup>の使<sup>つか</sup>ひもあはれをそへ、袖<sup>そで</sup>をしほりて帰<sup>かへ</sup>  
 ける。其夜<sup>そのよ</sup>も既<sup>すで</sup>に更<sup>みけ</sup>わたり、賤<sup>しう</sup>がふせやの灯<sup>とう</sup>し火<sup>ひ</sup>も、たえぐ細<sup>ほ</sup>き  
 折<sup>おり</sup>からに、病<sup>やまひ</sup>のかほをふりあぐれば、ふしぎなる哉<sup>や</sup>枕<sup>まくら</sup>の元<sup>もと</sup>にあら、  
 ぎはかみをささきて合掌<sup>がつしやう</sup>し、イザ剃<sup>そり</sup>てたべといふにおもはず飛<sup>とび</sup>お

きていただき付んとせしが、もしや消なば後悔せんと、思ひ極しが

自害、よし其人の望にまかせ、ともに手をとりにしなんものと、後

我に立は立ながら、玉を欺く首筋に、柳のいとのみだれかみ、剃も

ゑやらす漸おくれがみをなであぐれば、あやしいかな髪はこと

くく針を植たるごとくにて、つくくみればおそろしや、人のほ

だへに非らざるものなり。

官藏きつと心付、剃刀さか手に取なをし、たぶさつかんで咽の

くさを一刀にかきされば、大地も動く声をなし、戸を蹴破りて

逃したり。これより官藏人氣を得、血をしたひて追かけしに、初め

蘭が琴ひきたりし桜がもとに年ふる狸の咽をきられ、穴の内へ入

か、りて死したりける。官藏今はあきれて、却て丈夫の魂と

成しが、其夜の夢に蘭夫人の姿と成て、左に観音大士の像を捧げ

五色の雲の上より官藏をさしまねき、「我を忘れずさりし日のちか

ひを必ず守り給はす、是より女色を慎しみて学問出精し給へが

し。昨日の難を救ひしは守り袋の観世音、即是なる御影にて、初

め怪しき老人に逢給しも化身なり。是よりおん身につきまどひ、天

の道へみちびきは、妾がせめての志し。むげにばしなし給はる

な。」といふかとおもへば、夢はさめて心も自然に清くなり、終に

天下の名儒と成、年よりて後、かゞみ山に入、神仙となりしとか

や。或の曰、「鏡山の七叟の一人は、此官藏なり。」と。いづれか

是なることをしらず。

## 雨之燈第二終

### 怪談雨之燈初編第三

素羅 玉香山人著

成林 新狸散人校

#### 丹波小女郎殺二古狸一話

丹波小女郎は丹波の山中に生れし人なるが、成高くして力は十人

をかね、容貌亦類ひなし。此女生れ得て任侠にして貧なる者弱き

者を憐れみ、富るもの強き者にはたとへ死とも枉て従ふことなし。

人の冤をうけ、或は強き者に虐らるゝを見ては、己が身を忘れて

救ひ助くる性分にて、しかも操堅く恋慕ふ人多けれども、何れも

たんのうする様に断りして、又其ことを噂にせざるゆへ、恋せし人

も、弥焦れける。

或とき、母の衣裳を調んとて城下へ出て帰るさ、あつさに堪か

ねて、松かげに腰うちかけ肌を脱て涼みける折ふし、篠山に勧進

相撲ありとて、上がたの相撲とも大勢通りかゝりけるが、美しき女

の大はだぬひで居るを見て、手籠にして慰まんと一人の大前髪つか

くと立寄て、さし込手を左の脇に引はさめば、石につめられたる

如にて、さすがの前がみこたへかねて、「ヤレ人殺。」といふや否や、若手の者ども一同に「攫み殺せ。」ととりかゝるを、片手につかんで投のけく、かの前髪を宙にさし上げ、「手向ひひろぐと、此小わつば微塵になさん。」と石の角へさし付けば、流石の大勢辟易して、進退きはまつて見へたる所に、当時西がたの関相撲天の原伝右衛門と云者此所へ来かり、この鉢を見て小相撲どもを制し、小腰をかゞめ、「是は若者どもが無礼を致し、拙者に於て申訳もなき次第にて候。其前髪は相撲の法を破候者なれば、某へ被遣候へ。捻り殺し可申。」といふ。小女郎前髪を小脇に引はさみ、「若ひ時にはあばる、ならひなれば、苦しからぬ事にて候。かならず此子を痛め給はるな。自らがお断を聞届て給はらば、お渡し可申。」といふに、伝右衛門大に感じ、「いかやうとも御詞は背くまじき間御渡被下よ。」といふにより、ちり打はらい、「是より後、かまへてあはれ給ふな。」と六尺ゆたかの大男を五ツ六ツの小児のごとく帯を直し、皺を引つけ伝右衛門へ渡しければ、伝右衛門大に悦び、「此後は互ひに御親付になり可申。若京都へ御出あらば、必ず御尋下さるべし。」と念頭に挨拶しければ、小相撲どもみなく「恐れ入て、「先先刻は無礼の段真平御免下さるべし。」と誤り入て別れけるが、此事世上の流布と成、はながく復出たりといはざる人はなかりける。

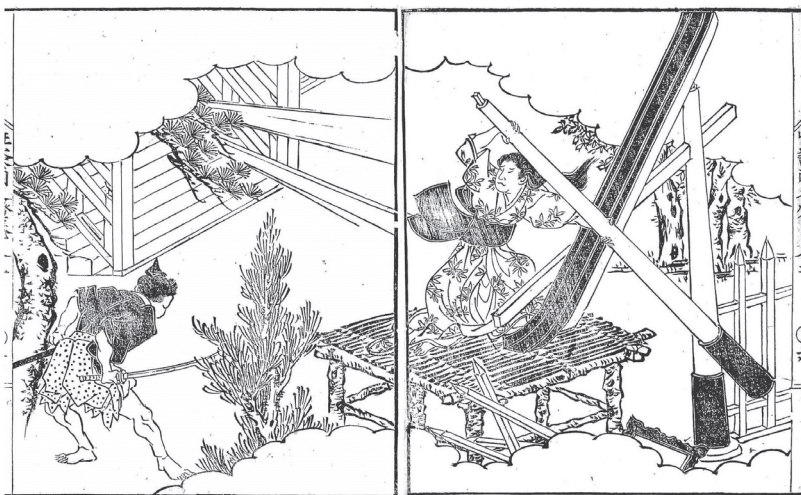
爰に中国浪人に、石部小三郎といふ者あり。此人幼きより聖人賢士の道をしたひ、筆を集め柳をあみ、既に年月を積し程に、経史諸子百家小説に至るまで、方寸の内におさめずといふことなし。是を以て、時の老儒先生の惡みを得、上に立もの皆目を側て石部をみるに至つて、終に冤の罪におとし、国を追出なければ、所々方々に流浪し、是ぞといふ馴染もなければ、足を留むる所もなく、まだ十八歳の若ものなれば、人に諂ひ世を渡る当世儒者の手段をもしらざれば、貯の金も尽果て、袖乞して丹波の国に入れるが、小女郎が此度の噂を聞て甘心し、「いかにもして此人にたより、一ツの住家を求めん。」と、はるく尋ね行、小女郎が在所の隣村へゆきかれば、近き村へ夜前盗の入たるで、目あかしでも大勢尋に出けるが、小三郎に行あひ、「あやしきさまの瘦浪人、子細あらん。」とおつとり、「巻く、れ擲け。」とひしめく折から、小女郎は此村に親類ありて見舞に来かり、此鉢を見て、目明を制し、「つくぐみれば、おちぶれても優美の性質、只ものならず。」とかたへ江招き、「いかなる御方にて、こへは何の用ありて来り給ふぞ。」と問ければ、小三郎、「某は少し望有て、小女郎と申婦人を見参候也。」といふ。小女郎はいぶかしく、「終に見なれぬ御方の、小女郎には何の用ありて御尋候哉。」と問詰られて、小三郎しかく「よし有鉢にはなしければ、然らばまつ待給へ。」し、目明しを呼び、

「これは自らが縁有御人なり。決してあしきこととする御方には非ず。万一有残をかける人あらば、自らが方へ来り給へ。」と云渡し、皆々帰りければ、小女郎は小三郎が顔をつくづくとうち守り、涙を流し、「痛はしや。天下に秀る御方も世に引立る者なければ、在所娘のわれぐに御頼とは勿躰ない。それをおもへばおもふ程、わたしが殿子は外にはない。自らこそ御尋の小女郎にて候也。わたしにお頼あるからは、おまへにも頼か有」と、今まで小町といはれたるみさほも、たちまち小三郎が志にはツイおれて、深き糸にしと成にける。されば小女郎は小三郎を伴ひて、八つ子町といふ所へ行、裏屋を借りてそれぐに、世帯の具を買ひ集め、四畳半なるうら借屋に、千とせ万代かはらじと、夫婦の契をなしにける。

既に日数も程ふれば、ふたおやのあんじも如何なりと、親類に逗留せしふりにて、我家へ帰り、それより両親へねがひて、月に一二度ツツ小三郎が住家へぞ通ひける。小三郎は小女郎が情によりて、八つ子の町に僑居をなし、少は心おち付ども、長き袖は能く舞ひ、多き銭は能く買ふと、貧なるものをば孔子をも東家の丘とあなどる世のなか、俗に對しても辱らるゝ口惜さ、おりぐに物がたりければ、小女郎は心を苦しめて、何とぞして取立んとおもへども、素より貧なる家なれば、月々の貢さへ親に隠して借り集る仕合なれば、せん方もなく只心をのみぞ痛める。

爰に同じ国の山奥に、土右衛門といふ者あり。舅のかたへ見舞んと、網引さげて朝より谷川に漁せしが、此日はいかなることにや、一尾の鰻をも得ず。只なまづ三頭を得て、是なりともとわらづとに入て引かたげ、三里ばかりの山の峯を越けるおりから、しよろぐみづの荒田の中にうさきあみを張たるに、雉の置りけるを、土右衛門きつと見付、「是くつきやうのみやけどなり。」と、奪ひとつて行んとせしが、「イヤぐ、人のものをたぐとるは、天罰も恐し。」と、よく此なまづに替んと、わらづとをほどき、なまづをあみにかけおきて行けるが、跡へあみぬし来り、これを見て仰天し、「此村初りてよりこのかた、此所になまづの居たるためしをきかず。然るに今、わが張しあみにかゝる不思議は不祥なり。」と、山家かた氣の一と筋にふるいぐ村の庄屋へ走り付、しかぐのよし物語れば、庄屋も大に驚きて、村中を会て此事を評説すれば、明日の日はや隣村へ聞へ、終に四方へきこへわたり、「ふしぎぐ。」といはざるものなし。

こ、におみて、山伏にたのみて易を筮し、吉凶悔吝いかんと問に、山伏の曰、「魚にして山に居る。是を物其天を離るゝといふ。たとへば人の田土を離れて、水に入が如し。なまづは陰物なれば、水に属す水物。此所にあらはるゝは、洪水の前びやうなり。村中水に流れて、魚の山に在が如く、人々皆亦水にすまんとの事ならん。



【挿絵】 卷三（6ウ・7オ）

然といへども、祈念は天を感ず。今天よりあらはし給ふ前表のなまづを、かめに入て餌を供じ、大明神と祝ひて歳時に祭りなば、其禍を通るべし。」と云。村中是に同じて、山伏のいふ通りにし、かめの上に社を建て、なまづ大明神と尊崇す。

其後さまぐの妖怪有て、人心安き時なく、終に毎年一人の娘を御供に備へければ、備へたる夜、其女行方知ずなりて、扱妖怪はこれによりて出ざりける。ことし、村の富民又兵衛が娘にあたりにければ、両親の悲しみとかなならず。何とぞ身がはりを立て、娘が命を救はんと、所々方々へ頼み遣はしけるに、丹波小女郎が方へも名高き人なればとて頼みけるにぞ、小女郎これを聞て不便におもひ、「いかに神と崇ればとて、人を御供に備るとは天道王法にも背くことをしらず。巫山伏にあざむかれ、邪見の事を甘んずるこそにくけれ。」と、はるぐと尋ね行、又兵衛夫婦に逢て、「自らは小女郎と申物にて候が、承ればなまづ大明神、人み御供をつづけられ候よし、それはあまりにむごき事にて候也。『神は非礼をうけず』とこそ承はり候へ。おや子の中を引分て、苔の花の肉むらを餌食にするとは、大飯山の鬼も涙をながすべきを、いかに神と敬へばとて、なまづづれの分際でどふよくにもくらわんとは、鬼にも過たる大悪無道。此小女郎が堪忍せぬ、イザ大明神へ案内あれ。鬼にもあれ神にもあれ、国の為人の為なれば引裂てわらはが餌食となし、永

く禍の根を絶ん。」といへば、又兵衛夫婦あきればはて、「もつたいたき事を仰らるゝもの哉。まのあたり御罰を蒙り給はんこと、御いたわしふこそ候へ。且又村中の者の夜の日がねられぬ大凶事の出来らんもはかり難し」と身振ひすれば、小女郎郎も詞にては論さずと、「しからは自らが御身に立申べし。万一命が終りなば、自らが夫ハツ子町の石部小三郎といふ者へ、命の代りと思召年々に心を付て給はれ。」といへば、夫婦は大に悦び、「兼て諸方へ申せし通り、命の代りは三百両。今御渡し申べし。若偽りなど申しなば、大明神の御怒り恐るべきことなり。」と、用意の金子をさし出せば、「いやとよ、自らが何にかせん。其心底を見る上は、おもひおくことさらくなし。返スぐも、小三郎へ必ず御渡し下されよ。」といへば、又兵衛感涙をながし、「然らば命の有うちに、ハツ小町へ送るべし。」と、急ぎ飛脚をぞこしらへける。

小女郎は、「つくぐと思へばおろかなる事ながら、若や運命尽はて、魚の餌食となるならば、いとしい人のいかばかり、我を恨みてもしやまた、病の初めとなりやせん。それに付ても、目のさきにみゆるがごとき恋人の、月の末にはかならずといふて別れし其時に、もしや心がほかくの花へうつりはしまいかと案じ過して取かわした手を突退て、『コレ申おまへの心が替りなば、わらは、所存がござんす。』と、ぴんとはねたも今ははや、我身の上となりし

ぞや。しんだあとても可愛ひと、思ふて後世のとふらひより、外の女にかならず、いとしがられて給はるなどは、うふもの、独居の寢覚ぐにわがことをおもひ出して悲しからん。いかなればうみ山隔て、生れし身の、どふした縁で此様に比翼連理のかたらひをしかとおもへば、ま、ならぬうきよのなかのうきことに、かゝる哀れもさきしやうの約束なるか。」と、恋ゆへにはさすが丈夫の魂も、あどなきことをくよくとおもふは女のならひかや。

さて牲備りしと、小女郎に沐浴させ、衣服を改め、村中の男女残らず群集して、神楽を奏じ、神酒をすゝめ、村繁昌を祈りける。社の傍には、一丈四方の棚をゆひ、小女郎をかきあぐれば、覚悟しながら今ははや、生死のさかひ近寄て、灯明の火の煌々と、日も暮はて、かななぎも、はらへの音声すみ渡り、神楽の鈴もおさまりぬ。小三郎は何気なく、月の末にはあひみんと、相如が伝を繰返し、「酒をうりし卓文君も、終にはかゝやく故郷のにしき、我今爰に沈むとも、上林子虚のもんさくは、九重の都の春にかなばしく、追付驕馬の車を擁し、人の耳目を驚さん。」と、おろかなる思案をなすは、当世学者の風流にて、皆山積のかばやきなり。

斯る所へ又兵衛が使ひ、三百両をもたげ行、しかぐのよし物語れば、小三郎仰天し、「いかに夫をおもへばとて、身を捨るとは甚だし。とはいへ、これは山中の民の心の朴なるを、巫修験の欺きし

故ならん。」とは思へども心ならず、使の者を案内にて、日を経て彼村に至りしが、今宵は痛はしや、人身御供を明神へ捧ると噂を聞いて、直にはせ付みれば、小女郎は柵のうへに白装束をまどひ、巫かんなぎが神はさめの最中なり。少しは心もおちつきて、かたへの松影に忍びて様子を伺へば、夜もはや初夜になりければ、人々村へ立帰り、社頭閑と静りたり。小女郎は懐剣ぬきもち、社のかたをきつと睨守りつめて居たりしが、不思議や、社頭鳴動し、「めりくゝいふは神かあらぬか。ア、怪しや。」と見るうちに、一丈ばかりの夜叉のすがた、忽こゝにあらわれ出、柵を目がけて来る所を、小女郎すかさず飛で下り、鳥居を引抜、よこなぐりに、「みぢんになれ。」とふり廻せば、忽たぬきの姿と変じ、逃る所を小三郎、「得たりや賢こし。」と、抜打に真二つに切れば、小女郎嬉しさ限りなく、又妖怪かと疑ひて、状を得と尋れば、小三郎始終のことを物語り、それより二人社を打破き、かめの内を見てあれば、あわれなる哉なまづ大明神、骨ばかりぞ残り居ける。

夫婦のものはうち笑ひて又兵衛が宅へ帰り、こよいの状を物語り、三百両をさし返せば、「正直者のおしかへし、私が娘ならば狸の為に殺さるゝは必定。さすれば是亦命の代り、少も御遠慮被下な。」といふにより、夫婦して神道のあらましを物語り、「此後人に欺れ給ふな。」と教へおきて、それより小三郎は八つ子町を引は

らい、小女郎を同道して京都へ出ければ、天の原伝右衛門、身に引受て世話し、終に大儒先生と成て、後に滄海先生と云しは此小三郎が事なりとぞ。

### 怪談雨之燈第三終

### 怪談雨之燈初編第四

素羅 玉香散人著

成林 新狸誹士校

麤屋才藏為三稻荷神二所二擁護話

難波の里は、高き屋の詠ありしより後、民富て風俗も優しかりし。慶長の頃とかや、麤屋の才右衛門といふ者あり。難波の里に於て一二を爭ふ富家にて、一子才藏に學問遊芸出精させ、十一、二より酢屋の勘兵衛といふ歌道學問達者なる人の弟子となし、日々其家へ通ひけるが、才知人に勝れける程に、十七歳にてもはや代講を勤め、内に入ては能父母に事へし程に、勘兵衛も我が片腕にもなるべき生立と、折には人にも風聴しける。勘兵衛ひとりの娘あり。掌上の珠と寵愛せしが、此娘ひそかに才藏におもひをかけ、去りし頃より何とぞして能首尾あらばあふさかの関、とめられぬ恋と成けれども、逢てはそれと得もいはず、只貌にちる紅葉ばの、てる日

もふる日も来る人に、心あわびの片おもひ、きせるを杖に物あんに、鬱<sup>うづ</sup>とりとして居る所へ、才藏は毎<sup>いづも</sup>のごとく玄関よりうち通り、「今日は暖和<sup>だんわ</sup>の天気、先生には何方<sup>いづかた</sup>へか御出なされ候哉。又御顔色<sup>ごがんしよく</sup>のよからざるは例<sup>れい</sup>の御積<sup>しやく</sup>でござるか。」と問はれて、おなみは、「いや、是はほやのゆへに、常住<sup>まじく</sup>此様<sup>このよう</sup>になやみます。」と返答<sup>へんとう</sup>。才藏<sup>さいそう</sup>博物なりといへども、「ほやの」といふこと終<sup>つい</sup>に知らず。さればとて根問<sup>ねど</sup>もならず、「いかさまそれは御難義<sup>ごなんぎ</sup>。」と、間に合口上取<sup>あひくちうしやう</sup>結び、扱<sup>さく</sup>弟子中<sup>でしちゆう</sup>と講習<sup>かうしゆう</sup>しおはりて、「今日は先生も留主なれば、銘々<sup>めいめい</sup>一首の詩を作り、歸<sup>かへ</sup>られての慰<sup>なぐさ</sup>に机<sup>つくえ</sup>のうへにおくべし。」とて、各小首<sup>おのこくひ</sup>を傾<sup>かたむけ</sup>て、五言七言十二體<sup>ごごんしちごんじふにたい</sup>、或は和歌を詠<sup>あい</sup>じけるおりから、おなみへ赤軸<sup>あかぢく</sup>の筆一對<sup>いつたうづ</sup>携<sup>も</sup>いで清書<sup>せいしよ</sup>をし給はゞ、「ほやのを參<sup>まゐ</sup>らせん。」と才藏<sup>さいそう</sup>に与<sup>あた</sup>へければ、「コレハ。」とおしいたゞきは戴<sup>いた</sup>きながら、「ほやの」とは合点<sup>がてん</sup>ゆかず。ふかく思案<sup>しあん</sup>をめぐらすに、赤軸<sup>あかぢく</sup>の筆を与へしは、我<sup>われ</sup>に形管<sup>けいくわん</sup>を贈<sup>おく</sup>るといへる詩<sup>し</sup>の、むかし賢<sup>かし</sup>き人の恋<sup>こひ</sup>の道<sup>みち</sup>とおもへども、再び我<sup>われ</sup>に向ひて「ほやの」といひし詞<sup>ことば</sup>の奥<sup>おく</sup>の、しれざればいかゞはせん。」とおもひしが、「イヤ、これはたしかに和歌<sup>わか</sup>の詞<sup>ことば</sup>ならん。歸<sup>かへ</sup>りて吟味<sup>ぎんみ</sup>せんもの。」と、其日は外々<sup>と</sup>よりもはやく退<sup>しりぞ</sup>きて、家におさめし『二十一代集』を取出<sup>とりだ</sup>し、かたはしよりよみけるが、其中に証歌<sup>しやうか</sup>あり。

しなのなるはや野、薄穂<sup>すきほ</sup>に出て

引かはなびかん今ひかばひけ

この歌をみるよりも、おもはず堅<sup>とろ</sup>き心も湯<sup>たう</sup>け、「さては我<sup>われ</sup>を恋<sup>われ</sup>したふにてありけるか。さりながら、我も一人の子、彼<sup>かれ</sup>もひとり娘なれば、とてもそれはぬ中なり。」とおもふほど、なをます恋<sup>こひ</sup>のふちへ入とも、斯<sup>かく</sup>までにおもはれ思<sup>おも</sup>ふ上からは、いとほぬ心と成けるにぞ、思案<sup>しあん</sup>をさだめて、文は人目の憚<sup>たふ</sup>ありと短冊<sup>たんさく</sup>に、

北風や我身は水の上の草

と書<sup>か</sup>き認<sup>み</sup>めて、よきしゆびあらば渡<sup>わた</sup>さんと思<sup>おも</sup>へば、自然<sup>しぜん</sup>とおくれがつき、また十七の若翠<sup>わくさい</sup>り、かほに紅<sup>べに</sup>ちる初恋<sup>こひ</sup>の念<sup>ねん</sup>が届<sup>とど</sup>きて、縁先<sup>へきさき</sup>へうかれ出たるお波<sup>なみ</sup>が袖<sup>そで</sup>へ、人の見ぬまど入るうち、「娘。」と、母親<sup>はは</sup>の尋<sup>たず</sup>ねるこへに見合<sup>あ</sup>した顔<sup>かほ</sup>で、後<sup>あと</sup>にといひ合せ別<sup>わか</sup>れて、我家<sup>わがや</sup>へ歸<sup>かへ</sup>りける。おなみはうれしき恋人<sup>かひ</sup>のおくりし文<sup>ぶん</sup>と、袂<sup>たもと</sup>より出しみれば、「短冊<sup>たんさく</sup>に上の句<sup>く</sup>ばかり書<sup>か</sup>たるは、いやといふのじやあるまいか。」と、はやまはり氣<sup>き</sup>の心をしづめ、「北風<sup>ほくふう</sup>とは詩<sup>し</sup>の北風<sup>ほくふう</sup>の章<sup>しょう</sup>に、『美人<sup>びじん</sup>我<sup>われ</sup>に形管<sup>けいくわん</sup>をおくる』といふことあり。この頃のふでのこと、嬉<sup>うれ</sup>しとおもふて句<sup>く</sup>の上<sup>うへ</sup>におき、文字<sup>ぶんじ</sup>こそ香<sup>か</sup>ばしけれ。わが身<sup>み</sup>は水の上<sup>うへ</sup>の草<sup>くさ</sup>とは、身<sup>み</sup>はうき草<sup>くさ</sup>といふことならん。古歌<sup>こか</sup>に、

わびぬれば身をうき草の根<sup>ね</sup>をたへて

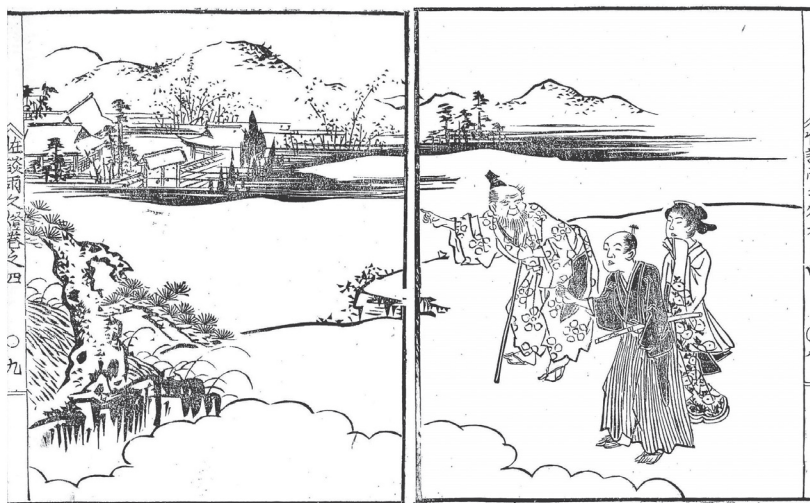
さそふみづあらばいなんとぞおもふ

といへる心<sup>こころ</sup>を書<sup>か</sup>給<sup>たま</sup>ひしいかに。」と、しばしかんがふるに、「一

人娘と一人息子、とてもこゝではそれはれぬ。なればわれだにがてんするならば、つれてのかん。」といへることか。此里にて一二を争ふ身代を、我ゆへにふり捨んと志。たとへしぬとも忘れはせじ。いづくいかなる所へなりとも、身のかんなんはいとはじ。」と、おもひこみたる娘気の、其夜は夢がうつ、ともしらぬふたおや、あかつきのかねに目ざまし、しはぶきのねほれし耳におなみがねごと、おもふことをあり／＼といふのを聞ば、おそろしやと夫婦は興をさましける。

明れば夫婦談じあひ、「何ともして此ことのあらはれぬよふ、規を加へて止させん。」と、娘を一問へよび、「わが身は子供心の浅はかに、魅屋才藏とかけおちせん約束ありとおぼへたり。さあれば、両家とも滅亡せんことまのあたり。爰の所を聞わけよ。汝に兄弟でもある魅屋に子たちが多ければ、おもひ合たかならば、何しに心をむげにせん。此方へ囃ふがあの方へよめらすが仕やうもやふは有なれど、いかにせん、両家ともに皆あと取の娘とむすこ、夫婦にしては一方が先祖へ立ぬ大不孝。汝一人の心へにて、大孝行となることを、常々父が講釈にいひきかすはこゝの事。」といはれて、はつと思ひながら、「それは合点のゆかぬこと、露ちりおぼへぬ無駄の仰。」とおはせも果す、大に怒り、「おのれちんずるほどいよく以て捨おかれぬ。才藏と通せしこと、ねごとに残らずまづかふく

いふたが、それでも覚へはないか。」と、見透すごとくきめ付られ、ふるふ心をおし詰め、「ねごとに言はふがどふせふが、露もおぼへのないことを、どふよくなる御詮義。」と、泣て見せても合点せず。「然らば『互ひに約束の心たがはず、ちかき内につれて退て給はれ。』と、才藏あてに状を書け。おのれがいはねば才藏が返事で事があらはる。』と、硯と紙をさしつければ、『今更何と言わけものつびきならぬ手詰と成、鹿を馬ともいはれぬはねごと、恋る其人のふでのあとまでうちあかし、かゝるうきめといふことをしらせてやらん。』とおもへども、かふく書けとて、おやがおしへることば、一々に兼て覚の約束をいはんとおもひしことばかり、目をはなさねばせんかたなく心のうちに祈願をこめ、「和歌三神も心あらばはるかに助け給はれ。」と祈念のむねにのりうつる神かあらぬか、古きよの歌を忽ちおもひ出し、目度出かしこのかの字をばわざとのの字に書認め、「何とぞこれをさとれかし。」と手ばやに封じて渡しければ、勘兵衛は下女を招き、かよふくにはからふべしと謀を捧げれば、下女は才藏がかたへ走り行、若旦那内用ありと部屋へ通り、「おなみさまより何事もみな承候。かやうなことを我々に御隠し遊ばすほど御身の為に宜しからず。」と文を渡せば、才藏ひらきみるに、「この頃の約束をたがはず、つれてのき給はれ。」との文牒なれば、返事を認んと硯箱に手をかけしが、



【挿絵】 卷四（8ウ・9オ）

かしこのかの字をのと書たはいかにとみるうち、「手のふるいといひ毎もの手跡にあらざるは、親に別れる悲しさか、亦是細の有ことか。」とおもひ出れば、「其むかし歌書を讀たる其なかに、

津の国ののしくの里に来てみれば

まつは根ごとにあらはれにけり

とおぼへたるが、さてはねごとにふたりが中をいふて人にもけどられしが此ふみいかにも怪しや。」と、下女に向て気色を正し、「おなみどのには狂氣とみへて、存もよらぬ約束など、文を賜はる覚はなし。急ぎ返つて人違ひがよしそれにもせよ。異見してきかれぬ時は我に知らせよ。『大恩ある先生なれば、我より屹と御異見を申されよ。』といふべし。」と、廣しき詞に下女もあきれはて、立帰り、勘兵衛に斯と告げれば、「扱はいよく娘がいひし通りなり。」と、是より心をゆるしける。

娘はそれより覚悟を極め、一首の歌を書いて才藏が書物の中へ入おきしが、開きみるに、「『ふるさとに今宵かぎりの命ともしらでや人のわれを待らん』と古歌を書しは、扱はあすのよ死なんととのしらせなるか。我とても何しに一人生ながらへん。」と、

ましてばし子をおもふやみに迷ふらん

はての山路の道しるべせん

と、同じく古歌にて知らせければ、娘は嬉しく、「さるにても死る

所は隔れとも、冥途は一つしでのみち。手を携へて往んもの。」と密に用意をなしけるが、既に日暮て人静り、父母の熟く眠らるゝを、今やく待居たるに、部屋の外面に足おとして、戸をしめあけに明るのは盗なるかと身も振はれ、父母をおこしなば死ぬ妨、と又ひとつ迷ひにまよふ程もなく、外より顔をさし出すは、魅屋才蔵が旅立、早ふくくと小手招きに、「これは夢かや嬉しや。」と振ふびざぶしやふくと忍び出れば、才蔵、「互ひに死ではおやへ、不孝に不孝を重ねば、しばし此場を立退ん。」と手に手を取りて行けるが、忽ち一人の老人あり。「二人の者しばらく待て。行先くはみな他人あつたら命を失はんもはかりがたし。我が家にかくまいくれん」といふに、二人は伏おがみ「然らば宜しふ御頼申上る。」と、跡に付しばらく行とおほへしが、金殿楼閣玉を布く庭のかざりは蓬萊の山を象る奇麗の宅、二人を二つの高どのに分てかくまふ主の心、心あらんと別るれば、女中あまたがかしづきて、山海の珍味を集め、日々夜々の管弦にうさをもしばしは忘れける。才蔵は、「今宵こそ別れく」に死とても、冥途の旅は手を引て、ひとつ連に永きよを楽んで暮さんとおもへど、まいちど顔を見て死んだらおもひはあるまい。」と忍び出て、酢屋の軒窺ふさきに立姿は、たしかにそれとさし覗けば、娘お波は忍び声、「今更死では大恩のおやへ不孝にふかうを重ねる道理、此わけいふて諸ともに

立のかん。」と爰迄は忍びて出たと聞うれしき、「しからば早く。」と手を引て、行さきくもくらやみに、灯ちんとほして二人とも先待てといふに驚き、逃んとするを二人とも驚くことなかれ、汝等がこと皆しつたり我が家に養ひおかと引立られ、こはくながら行程に、是も同じく金銀の楼榭台観嵯峨と建並べたる其中に、夫婦ともまづ当分は別れて居よと別におき、詩歌管弦を以て女中あまたにとりまかれ、既に数日を経たりける。

去程に、難波には、魅屋才蔵勘兵衛が娘をつれて欠落したりと、諸寺諸山へ祈願をこめ、四方へ尋る人を出し、おやくのあんじはいふばかりなし。両家ともに代々玉造といふ所の稲荷を信仰せしは、此度もふかく祈請をこめけるに、或夜の夢に稲荷大明神両家の親に告て宣はく、「いたく心を傷ましむることなかれ。我子を見たくばこれみよ」と、両の御手の掌に、才蔵とお波とをさ、げ給ふと見へければ、翌朝急ぎ両家ともに稲荷の社へ参りける。さればふたりの者は、日々管弦を聞て楽しむといへども、才蔵はおなみを恋ひ、おなみは才蔵を恋わびて、女中に斯とたのみければ、「しからば明朝あはせ申さん。」といひけるにぞ、ふたりのものは夜の明るをおよぎ付ほど待こがれたる。「恋人はこゝに。」と聞く襖の内、「才蔵さまか。」「おなみか。」といふ声を聞付て、両家の親は拝殿の下を見るに、二人堅固で縁の下に、「これは爰にはどふ

して居た。女中方とみへけるは夢にてありしか。其上に、我が親々におふことの恥しさよ。」といふを聞いて、両家の悦び斜ならず、急ぎ乗物かき寄て、「かゝる奇瑞の有うへは、娘を魅屋の姫となし、出生の子は男女にかゝわらず、魅屋のつぎ木となすべし。」と、直にこれよりよめ入し、三々九度を行ひける。其後男子二人出生し、長子は酢屋の養子となし、末はんじやうにさかへけるとぞ。

## 怪談雨之燈第四終

## 怪談雨之燈初編第五

素羅 玉香山人著

成林 新裡子校

磯嶋忠三郎為「幽霊」報「仇話」

磯嶋忠三郎は、周防の国司太宰大貳義隆の臣下磯嶋半左衛門といへる人の次男なり。此人、戦国に生れても文雅の道に志し、吾国風の三十一文字は殊に好める所なり。ことし十六歳に成けるが、一家中に類なき美男子にて、城外へ出れば、町家の女が影隠るゝまで見送るとて、友達のお口に、「彼を大将にして女軍を起さば、日本国を従へん。」と嘲り誇る程、忠三郎いよく謙り、礼義堅固

に勤けるが、情の道は心の外と哉覧。

同じ家中に早川与三右衛門といふ人あり。独りの娘を持けるが、美人の譽れ世に高く、殊に華和の文に達じ、国司大貳の耳へも入ける程の才女なり。此娘、ふと忠三郎を見初め、深く思ひをかけしが、さすがにそれと得もいはず、過行月日にます恋のつなともなれと、一首の歌を詠て、父与三右衛門に頼み、忠三郎が添削をぞ願ひける。与惣右衛門何の気もつかず、素より娘は文雅を好み、身のおごな一室中の手本ともなるものなれば、かくあらんとは思ひきや、忠三郎に頼みければ、「畏り候。」とて短冊を展れば、手枕へ夜ごとにかよふ梅が香の

た、ぬうき名ぞあわれなりける

忠三郎威儀を正し、「さてく驚き人たる御秀吟、なかく我々しきの批判すべきに非ず。去ながら此後とて、御秀歌は拝見を願上ます。」と短冊を写しとりて、与三右衛門へ返しける。忠三郎つくく此歌の意を味ふに、其心ばへよりして、誠に閨帷の風を存じ、目に見るごとき神韻に、思はずうつる男のならひ、「折もあらば。」と、此日よりあこがれけるも理りなり。

其後、馬の稽古より帰るさ、柳の馬場にて与三右衛門が娘のおふで、社参の道すがらに、柳のいとしに短冊をかくる所へ通るかゝり、伴の女中が「あれ磯嶋。」といふに、おふではうれしさの又恥かし

き初恋路 忠三郎もそれと見て、互に挨拶もおはり、「扱先月は御  
よみ歌拝見致し候が、驚き入たる神韻色沢。以後は此方より御添  
削を願います。」といはれて、かほに紅のたもとより、一封取出  
「是はちかきころのよみうた、憚ながら直にお願ひ申ます。」と差  
出せば、忠三郎も懷中より一封を取出し、「拙者が草稿も御覽被下  
よ。」と、互ひに心をとりかわせしは、後のあわれを引出す縁のお  
だまきなりけらし。

是より互にきしやうを通じ、天にあらば比翼の鳥、海に入らば比  
目の魚と、ふかきちかひをなしけれども、忍びあふよはなかりけ  
る。与三右衛門が家来軍平は東育ちの者なるが、深くおふでを恋  
こがれ、文の数々におくりけれども、おふでは「手にも虎の尾を  
ふむ心地するむくつけおとこ、それと父へ申なば、彼が命にかゝわ  
らん。」とじつと忍へてくらせしが、けふはいかなる悪日ぞや、お  
ふでが袖から手水場へおちたるふみに氣も付ず、入を待かね軍平  
は、掃除の場より見付しが、たしかにふみを拾ひ上見れば、磯嶋忠  
三郎とふかき中なる文体に、くわつとせき立つ心をしづめ、「おの  
れ、おもては賢女と見て、内訌でこつそりと斯の大事をして居る  
こそ、付込所。」と、うらの庭へおふでが出たを幸ひに、日もはや  
暮て幸ひと、袖をとらへて、「コレ申、雨のふるほど上る状に、ど  
ふして返事はなされぬぞ。否ならいやとおつしやれ。」といふに、

おふでは「コレ軍平、おとこの習ひといひながら、道を守る自らに  
アンマリ無理じやないかいの。若爺様が聞てなら、你は首が有まい  
が、儂が方から手を合すふつり思きつてたも。なんの你を嫌はせ  
ぬ。どんな美しい人からでも、親のゆるさぬいたづらはならぬが、  
学問するものゝ道じやわいの。」といはせもはてず、「ソリヤ大なう  
そ。今の学者のいふことは、半分はやまじやと聞たが、果してそん  
なことおつしやる磯嶋忠三郎殿とはいたづらをなされませと、アノ  
旦那からお許してござりますか。」と星をさゝれて、さしものおふ  
でひるむ所を、「コレ申、それが隠してほしいなら、どふぞ叶へて  
下さりませ。」とむりにかゝつておし倒すを、「コレハ無理な。」と  
握り拳、眉間をした、か叩かれて、「おのれ惣嫁め、捨おかれぬ。」  
とがんぜきおとしに石の上、おふでが命は絶はてたり。

軍平はそれよりさあらぬ体におもてへ出、門の戸メるふりをし  
て、終にはるかに落延ける。娘がいぬと尋るうち、築山の石の上に  
頭みぢんにうち砕かれ、あへなき死骸を認出し、「何者のしはざ  
ぞ。」と家来を呼とも居らざれば、合点ゆかずといふ内に、磯嶋が  
文のおちたるを見て又びつくり。「扱は。」と簞笥を吟味するに、軍  
平が文十四五通ふうじもきらず入たるにぞ、「是はかならず、軍平  
が恋の意趣にて殺せしならん。」とおやの悲しみ一トかたならず、  
一門不残寄り集り、急ぎ国主へ訴へける。

磯嶋忠三郎は斯ともしらず、灯のもとに書を繙き、見ぬよの人のふることを吟味して居たりけるが、夜もはや四ツとおぼゆる頃、戸を開く内へ入は与三右衛門が娘のおふで、「こよいは丁どよひしゆびで、内を忍んで堀を越し、やふく」と参じた。」と嬉しげによりせば、忠三郎もあきれながら、「大胆なことせぬもの。」といふも、嬉しき恋中のおふでは、猶も疑ふて、「起証は互ひに取かわせど、もし自らがさいなんで外の人から恋しかけ、叶はぬ時のやはらだち、首を取て立退ひたれば、你は何とかあそはず。」といふをうち消し、「さやうな不祥なることはいはぬもの。」といへば、「いやく、かくいふことまでも御心底をき、届けねばならぬこと。おいやなれば、自らもいやなり。」といふにぞ、忠三郎、「ソレハ知たることなり。我も武士の家に生れ、義を専とすることは、生ると腸にしみ込であることなれば、氣づかひあるな。万一左様ことが有ならば、何所までも追かけて、敵をとらひておくべきか。御身に犬死はさせまじきほどに、心易くおもひ給へ。」といふに、おふではたもとより軍平が文取出し、「家来軍平が度々の恋慕、殊に短慮なる生れつき、若や二人が中のこと露ほどでも知たなら、どんなことが有ふもしれぬ。彼は関東生れの渡りものなれば、そんな時にはかならず江戸へ落ゆかんが、それでも你は追かけて、敵を取て給はるか。」と文を渡せば、忠三郎笑て、「女ほど何どなきことを

おもふ者はなし。ソリヤ知れて有こと。」、聞て、おふでは落涙し、「忝き御詞。万一左やうのことあらば、妾が魂、你的身に付そふて離れはせぬ。丈夫におもふて給はれ。」とかつぱとふしたは音ばかり、形は消て失せにけり。

忠三郎仰天し、「甚怪しき事なり。」とおつとり刀で走り出、与三右衛門が屋敷の辺へ行て、内の様子を窺へば、「軍平がおふでを殺して立退たり。」と一門中が寄集り、「届けよ。人よ。」と立騒げば、「扱は我を頼にして、かたきをとつて囃ひたさ、幽霊となり入込しが、可愛のものや。」とどふと伏し、前後もしらずなげきしが、「よし是からは、軍平を尋出し、敵をうつてとぶらひせん。」と、おふでがおしへに従ひて、覚悟を極め、与三右衛門と両親へ書おきし、直に其夜城下を出、関東さしておつかけ、る。大主大貳、此旨を聞給ひ、急ぎ隣国へ人を出し、軍平が有家を尋られる。去程に、磯嶋忠三郎は関東さして趣しが、路用も多くもたされば、浅草辺にうら屋をかり、敵を見出す便にと、虚無僧の姿となり、半年ばかり尋れども、在所さだかに知れざれば、おふでに何とい、わけも、なかぬ夜とはなかりける。

爰に、吉原の傾城に金山といふ者あり。一日、忠三郎心易き人々に誘はれて、この里へあそびけるが、尾羽うちからせど人は武士、殊に天寶きりやうある才子歌人を方寸に兼たる人と友だちも座なみ

よくこそ待ひける。此日、忠三郎はいさ、かいたづきありとて、只酒のみ飲め、娼婦をば招かざりけるにぞ、外々はみな花のとき美人をおのゝ手折あひ、忠三郎に和歌などたのみて一段興を催しぬ時に、金山奥座敷より来か、り、「歌よむ客は珍らし。」と襖の影に、白葉といへる妓の舞扇に、忠三郎一首の歌を書ける。

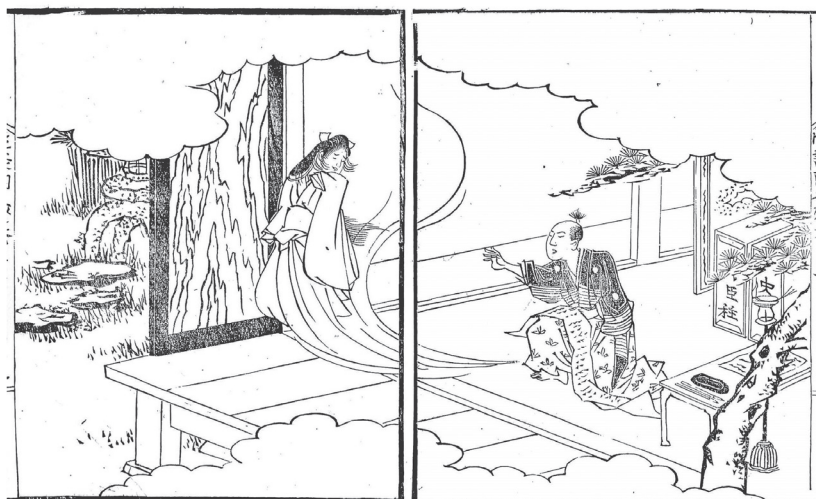
ものゝふのまだ捨てやらぬ梓弓

何としらはのつがふべきやは

人々これを吟じけるを、「みれば見るほど愛らしき、十七八の美少年の相かたもなく、しよんばりと歌のみ詠むはいとおしや。又よみ歌に、しらはを上ふることばのあるはねたましや。」と、りんきのおこるはつとめのみ也。襖をおしあげ、「其扇ちよつと見せて給はれ。」と、取よりはやく忠三郎が背を三つ四つかさねうち、突ころされてあからむかほ、「コハ何事。」としらはがりんき、忠三郎も興を催し、「きみ達に叩かれて一分はすまねども、しらはが扇で叩かれたれば、いたむほどのことでもない。」といふに、金山猶かんしやく、忠三郎を引立て、ふすまの内へおしやり突やり、襖を立きり、「そなたさまには何として、お子たちをば呼給はぬ。」と、おのれが恋のかげはしを、忠三郎はおふでが事をいはれもせず、「さればとよ。某は少し望ありて遠国より参りし者。様子有て情欲は絶ております。」といへば、「さるにても、いかなるゆへにてさやうに

はなされ候哉。うけ給はり候ては、いやしきつとめの身なれども、おちからそへる心もあらん。」としんせつなる詞に、忠三郎、「忝し。」と一礼し、「一通り物語らん。某は国元にてかたらしい女ありしが、我ゆへに非常の死をなし、まだ半年もた、ぬうちなれば、外の女中に通じては、其魂魄へ義理立す。いとしかはゆきかななりしを、今はひとりの身となりし心を推量してたべ。」と落涙すれば、とも泣になくも恋路のかけみちなり。金山忠三郎が住家を聞て、こまぐと書付て別けるが、忠三郎は早く帰り、金山がやさしき志にかんじ入て臥けるが、とほし火の影よりはたへを霜にふるがごとき一道の寒風吹おこり、あやしと見る間に、おふでが姿靈々然とあらはれ出、「遠き他国へかたきをしたひ来て、よき手が、りもなきに、又傾城の情をふせぎ給ふかや。けふの女にとり入給はゞ、かならずかたきのあり家もしれん。かならずかれが志をむげにばし給ふな。」と、いふ声残りてかきけすことくなりければ、忠三郎かんるいし、おふでが教に随ひて金山へ状を遣はし、「心底の程忝し。今よりは力と成て給はれ。」と細くと申遣はしければ、金山もうち悦び、それよりは折々部屋へ通ひける。

或時、忠三郎国元のやうす不残物がたり、「何とぞかよふの人相を見かけなば、必ず知らして給はれ。」といへば、金山横手をうち、「それはどふやら見たる人相なり。遠からぬうち御知らせ申上ん。」



【挿絵】 卷五 (12ウ・13オ)

といひけるが、程なくやりてに相図の状をもたせて来りければ、忠三郎大に悦び、急ぎ金山が部屋へ行様子をとへば、金山、忠三郎が手をひいて、そつと二階の客の顔、一目見るより忠三郎かけ入らんとするを引留めて、部屋へ伴ひ行、「弥敵に極らば、こゝで討給ひては廊の難儀なれば、かへる道にて討給へ。」といふに、磯嶋、「げに尤。」と、其夜は金山が部屋に宿し、翌朝軍平が帰る途中に立ふさがり、「いかに軍平、磯嶋忠三郎を覚へたらん。おふでがたき、尋常に勝負せよ。」と詰かくれば、軍平からくとうち笑ひ、「二才め、能もかたきうちとはでかしたり。コ、ハ途中人目多ければ、今宵普賢寺の門内にて立会てくれん。首を洗ふて出会おれ。」と三云。磯嶋猶も疑ひて、「是非に勝負。」と詰かくれば、「おのれ位の小世倅に恐れて、数百人の指南がならふか。左様な北嶋軍平とおもふかや。身が内へ来て今宵を待て。」といふ。「然らば弥四つ時に出会ふべし。」と詞をつがひ、忠三郎は立帰て用意をなし、日の暮るを待兼しが、「おもへば金山が情の程、一トかたならぬ心底も、もし返りうちにあひなば、さぞや悲しくおもふらん。又あふこともはかられず。」と、又吉原へ行、金山が顔をつくぐうちながめ、「今宵の勝負心元なし。又逢ことも図られねば、御身も随分堅固にて、若し返り打にあふたるときは、是までの契をおもひ、忌日くにおもひ出し、一遍の廻向して給はれがし。浅からぬ御身が

情、未来永々忘れはせぬ。」とうちしほるれば、金山こらへかねて大に笑ひ、「いかさま侍らひかたきにて左やうにおほすも断ながら、是までかならず替るまいと書た起証は百本やら千本やら、かぎりも知ぬ客ごとに一々回向するならば、勤する日はよもあるまじ。はやく御帰りは遊ばせ。自らは用事有」と機をあらく引立て、二階座敷へ行ければ、忠三郎くわつとせき立、「おのれ畜生一トうち。」と立上りしが、「待し。今宵の大事をふまへながら、短慮しては仕損ぜん。とはいへ憎き畜生め、よし／＼軍平を討て後、生てはおかじ。」とにがりきつて立帰り、既に約束の刻限なれば、普賢寺へ入置しに、軍平既に待かけたり。「いざ小わつばめ、おふでと俱に成仏せよ。」と切てか、れば、「合点。」と抜合て切結ぶ。剣術修練の軍平がふみ込、巻り立てる刀はいなづま。磯嶋が既に危ふく見へし所に、軍平が後より小性だちの侍、ふかあみ笠にかほ隠し、刀を抜て軍平が左のかたさきすつばとさる。「ハツ。」と後へふりかへるを付込磯嶋、軍平を大げさにきり付たり。

とゞめをさして刀をおさめ、小ごしを屈め、「どなたかは危き所を御助太刀、かたきをうたせ給はること忝し。」と一札すれば、彼侍あみ笠とれば、金山が男出立に又びつくり。「これは／＼。」とばかりにてあきれ果れば、金山、「今晚部屋へ見へし時、うちしほれたる御心、『それでは敵はうたれぬ。』とあいそつきいふた時、

妾が心の苦しきは血を吐やふにありしぞや。はげみは付たれども心元なく、且又ふかくちかひし身がじつとして居られふか。二階の客をたぶらかし、大小あみ笠ぬすみ出し、跡を慕ふて参りし。」と聞て、磯嶋かんじ入、「其心とは露しらず、『おのれ畜生一トうち。』といふた詞がはづかしい。」と互にわつと泣けるが、「まづ／＼、客のしらぬうちに早く帰て首尾よくせよ。」と金山を返し、夫より足利將軍へ願ひ出、大内義隆へも訴ければ、義隆喜び斜ならず、磯嶋を召かへし、新に五千貫をぞ領じける。周防へ引とる時分に、金山をば義隆より請出して、磯嶋が妻女に申付られしとぞ、目出度に申伝てむかしがたりとはなりぬ。

#### 怪談雨之燈第五終

刊記（裏見返し）

寛政九巳正月

心齋橋筋博旁町

柏原屋 重兵衛

大坂書林 堺筋高麗橋南江入

塩屋 権平

（以上）